

青森県埋蔵文化財調査報告書 第546集

# 三内丸山遺跡41

— 旧野球場建設予定地発掘調査報告書14  
北の谷(1) —

2014年3月

青森県教育委員会



# 三内丸山遺跡41

— 旧野球場建設予定地発掘調査報告書14  
北の谷(1) —

2014年3月

青森県教育委員会





北の谷の位置（白線で囲んだ範囲）平成6年撮影



北の谷の調査状況（平成6年撮影）



北の谷出土円筒下層式土器



北の谷出土鉢形・台付土器



北の谷出土抉入扁平磨製石器



北の谷出土半円状扁平打製石器



北の谷出土砥石a類（手持ちの砥石）



北の谷出土磨製石斧と加工用具

# 序

青森市に所在する三内丸山遺跡は青森県総合運動公園拡張整備事業に係る新県営野球場建設に先立ち、平成4年度から平成6年度まで県教育委員会が発掘調査を行いました。

調査の結果、本遺跡は縄文時代・平安時代・中世の複合遺跡であることが明らかとなりました。特に大規模な遺構、多種多量の出土遺物から、縄文時代前期中葉から中期にかけて約1500年以上継続して営まれた円筒土器文化を代表する大規模な集落跡であることが判明しました。

本書は北の谷地区にかかる成果のうち、土器・石器などの出土遺物についてまとめたものですが、今後三内丸山遺跡の解明及び埋蔵文化財の保護と研究に役立てば幸いです。

最後に調査及び本書作成に御尽力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

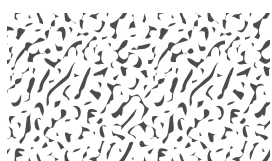
青森県教育委員会

教育長 橋 本 都



# 例 言

- 1 本報告書は平成4～6年度に実施した青森県総合運動公園拡張整備事業に係る三内丸山遺跡の発掘調査のうち北の谷から出土した土器・石器・土偶・土製品についての報告書である。遺構やその他の遺物・各種分析等については来年度に刊行予定である。他の遺構の報告については巻末の「特別史跡三内丸山遺跡発掘調査報告書一覧」(207・208頁)を参照されたい。
- 2 調査の概要および遺跡周辺の地形・地質等については、『三内丸山遺跡Ⅹ』(青森県埋蔵文化財調査報告書第250集平成9年度青森県教育委員会)の「第Ⅰ章調査に至る経過と調査要項」、「第Ⅱ章調査の方法と経過」、「第Ⅲ章遺跡の概要」を参照されたい。
- 3 三内丸山遺跡の遺跡番号は01021番である。
- 4 挿図の縮尺は各図に示し、土器1/3、剥片石器・土製品類1/2、礫石器1/3を基本とした。
- 5 石器の石質鑑定は、国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授柴正敏氏に依頼した。
- 6 遺物の文・図中での表現は原則として次の様式・基準に従った。
  - (1) 遺物には観察表・計測表を付し、出土地点、法量及び諸特徴を一覧できるようにした。
  - (2) 縄文原体は、『日本先史土器の縄紋』(山内清男1979先史考古学会)を参考に分類し、記述はそれに従った。ただし、観察表では以下のように省略した。  
結節回転文ー結回、単軸絡条体○類ー単絡○、結束第○種ー結束○、多軸絡条体ー多軸絡また表中では、縄文原体の回転文の場合は種類のみ、押圧文(捺糸圧痕・側面圧痕)の場合は種類の後に「押」を付けている。馬蹄形の圧痕については「R馬蹄押」のように表記を分けている。隆帯・貼付帯上の施文文様は「貼」の直後に括弧書きした。
  - (3) 観察表中では、以下の略語で縄文原体以外の土器文様や付着物等を記載している。  
竹管状工具による刺突ー竹管刺突、半截竹管状工具による刺突ー半竹刺突、ヘラ状工具による刺突ーヘラ刺突、折り返し口縁ー折返炭化物付着(部位)ー炭(部位)、漆塗布(部位)ー漆(部位)、赤色顔料付着(部位)ー赤色(部位)。  
付着物等の部位については、外面全体ー外、内面全体ー内、口頸部外面ー口外、口頸部内面ー口内、胴部外面ー胴外、胴部内面ー胴内、胴部外面の上半部ー胴外上、胴部外面の下半部ー胴外下、胴部内面の上半部ー胴内上、胴部内面の下半部ー胴内下、底部内面ー底内、底部外面ー底内と略記した。
- 7 発掘調査によって出土した遺物、実測図、写真等は、現在、青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡保存活用推進室が保管している。
- 9 図中に使用したスクリーントーンは以下のものを表す。



敲打(礫石器)



すり(礫石器)



磨耗・被熱範囲(礫石器)



鈍い光沢(礫石器)



# 目 次

口 絵  
序  
例 言  
目 次

## 第IV章 縄文時代の検出遺構と出土遺物

### 第10節 北の谷

1. 調査の概要	1
2. 北の谷の範囲と層序	3
3. 北の谷出土遺物	
(1) 土器	5
(2) 石器	82
(3) 土偶	147
(4) 土製品	162
出土遺物観察表	165
遺物写真図版	181
特別史跡三内丸山遺跡発掘調査報告書一覧	207
報告書抄録	209



## 1. 調査の概要

三内丸山遺跡では、北盛り土東側の谷地形を北の谷、南盛り土の南側の谷地形を南の谷と呼称している。北の谷は遺跡が立地する東西に延びる台地の北側に位置し、沖館川に向かって開析する谷地形である。旧野球場建設予定地の調査区ではV L～V S -77～100 までとなる。発掘調査前の現況は、沖館川に近い北側の低地は湧水が豊富であり、水芭蕉やススキ等が繁茂する湿地となっており、谷の南側の標高が高い地点では乾燥化が進んでいた。また、現代のものと思われる水田の畦畔跡も谷全体に見られた。

掘削作業は平成4年から着手した。当初、排土場所を確保するため、谷の西側にトレンチを設定し、先行して掘削を行った。その結果、現地地形より谷が相当深く、また、前期末の円筒下層d式土器がまとまって出土したこと、緩斜面から谷にかけて大規模な捨て場の存在が予想され、排土場所の確保を断念し、谷全面を掘削することとした。

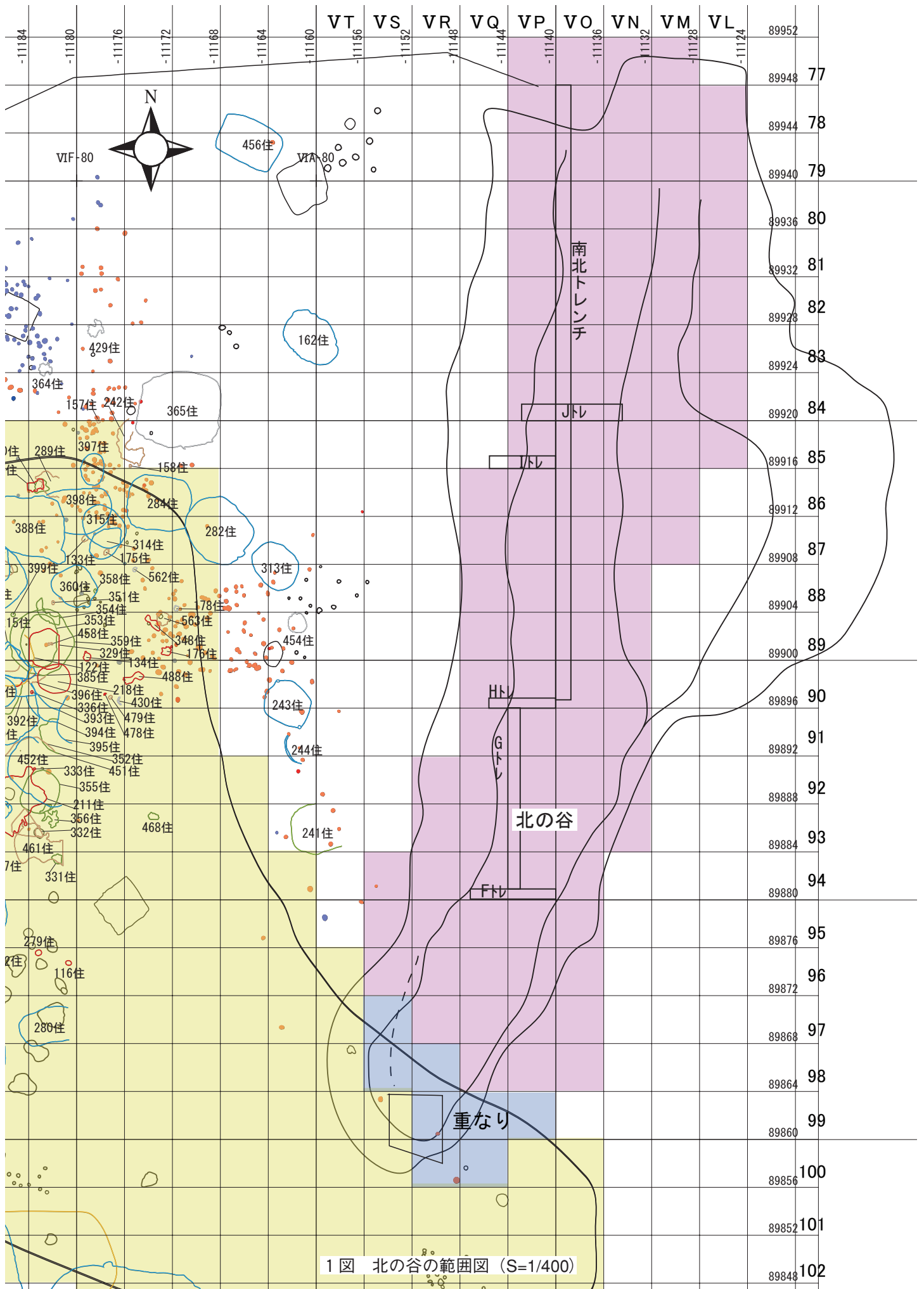
調査にあたっては、表土(第I層)が厚く、また、第II層中に平安時代に降下した白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm)が堆積していることが先行調査で確認されていたため、その上面まで大型重機による掘削を行うこととし、それ以下の文化層については人力による掘削とした。第II層まで掘削したところ、谷の北側では幅が広がり沖館川に接続していることから調査面積が想像以上に拡大することや、湧水量が豊富であるため常時排水が必要となることが判明したため、排土用のベルトコンベアと大型の排水ポンプ設置し、作業の効率化を図った。人力で縄文時代の遺物包含層の直上まで掘削を進め、平成4年度の調査は終了した。

平成5年度はさらに人力による掘削を進めたが、野球場建設工事との調整の結果、スタンド建設部分の精査を優先することとなり、他の調査地点に発掘調査作業員を配置したため、谷の調査は停滞することとなった。しかし、夏以降本格的な掘削が進み、湧水が豊富な低湿地部分では動植物遺体や漆器などの木製品も出土し始めた。また、谷全体には大量の土器が廃棄されていることも明らかとなった。所々には杭と見られる直立した木材も確認された。

調査の最終年度となる平成6年には掘削及び精査を重点的に行った。大量に出土している土器はトータルステーションによる実測の他に写真測量も併用し、作業の効率化に努めた。掘削が進むにつれて動植物遺体の出土量が増加したことから第III b層より下層については土壌を全量回収し、水洗選別を行い、微細遺物の回収を行うこととした。湧水はさらに激しくなったため、調査区内に沈砂池を作り、土砂の流失を防ぐ処置がとられた。

8月、発掘調査の中止と遺跡の現状保存が正式に決定したため、進めていた掘削と精査を止めることとし、保存に向けての措置を行うこととなった。その時点で、精査が進み露出していた杭列の一部や種子密集ブロックについては展示用に土壌ごと切り取り、保存処理を行うこととした。また、谷全体の様相を把握するために地山層の確認を行うこととし、基本層序観察用の畦に沿って部分的に深く掘削した。露出していた土器については上に透水性マットを敷き、その上に山砂を入れ、さらに保護盛り土を行った。木製品についてはできるだけ取り上げることとした。埋め戻し作業と並行しながら、今後の保存のための水位観測用の井戸を設置し、降雪の中、12月に全ての作業を終了した。

(岡田 康博)



1図 北の谷の範囲図 (S=1/400)

## 2. 北の谷の範囲と層序

### (1) 北の谷の範囲

北の谷は旧野球場建設予定地内のほぼ中央部V R - 100 グリッド付近) が谷頭となり、そこから北北東方向に向かい、沖館川に流れ込んでいる。谷頭付近の確認面での標高は約 15 m、調査区北端で標高は約 8 m である。谷底の標高は 95 ライン付近で約 8 m、80 ライン付近で約 4 m である。谷幅は谷頭付近 (97 ライン) の上端幅が約 18m、91 ライン付近で東側に大きく膨らみはじめ、85 ライン付近での上端幅が約 40m、調査区北端 (80 ライン付近) での上端幅は約 24m である。周辺には、西側に北盛土が存在し、南側には掘立柱建物跡群が存在している。北盛土と北の谷はおおむね 95 ライン以南で重なっている。北盛土の下には縄文時代前期の竪穴住居群が存在している。谷の東側は遺構の密度が薄く、土坑墓列や中期の竪穴住居跡、古代以降の建物跡や溝跡などが存在している。今回の報告では、北の谷の範囲を 1 図の着色範囲内 (紫色) とし、範囲内から出土した遺物のうち、第Ⅲ層の土器の一部・石器・土偶・土製品について報告する。

### (2) 層序の概略

北の谷の調査では、表土を重機などで除去した後、第Ⅱ層を人力により掘削した後、第Ⅲ層の精査に着手している。

谷を埋積する土層の概略と他の地点との対比図を 2 図に示した。第Ⅰ層は表土である。第Ⅱ層は黒色のシルト質土で、おおむね縄文時代中期後葉以降に形成されたと考えられる。層中位には白頭山苦小牧火山灰と十和田 a 火山灰が薄く堆積している。第Ⅲ層は、2 図の通り a ~ c に大別されている。

第Ⅲ a 層と第Ⅲ b 層は、北盛土の調査で設定された層で、第Ⅲ a 層は、シルト基質に地山ローム・炭化物・焼土・多量の遺物を含み、縄文時代中期前葉～中期後葉に堆積した層である。第Ⅲ b 層はシルト基質に炭化物・多量の遺物を含み、縄文時代前期後半～中期

遺跡基本層序	北盛土	北の谷
第Ⅰ層(表土)	第Ⅰ層(表土)	第Ⅰ層(表土)
第Ⅱ層(黒色土)	第Ⅱ層(黒色土)	第Ⅱ層(黒色土)
第Ⅲ層(黒褐色土)	第Ⅲa層(褐色土)	第Ⅲa層(暗褐色土)
第Ⅳ層(黒色土)	第Ⅲb層(暗褐色土)	第Ⅲb層(黒褐色土)
第Ⅴ層(暗褐色土)	第Ⅳ層(黒色土)	第Ⅲc層(黒色土)
第Ⅵ層(黄褐色土)	第Ⅴ層(暗褐色土)	第Ⅳ層(黒色土)
第Ⅶ層(橙色土)	第Ⅵ層(黄褐色土)	
	第Ⅶ層(橙色土)	

2 図 層序の概略と対応表

前葉に堆積した土層である。これらの層は北の谷全域に見られるのではなく、谷頭付近の北盛土に接する部分に分布する。第Ⅲ a 層が縄文時代中期前葉から中期後葉に、第Ⅲ b 層が縄文時代前期中葉～縄文時代中期前葉にそれぞれ堆積したと考えられる。第Ⅲ c 層は、シルト基質にローム粒がやや多く含まれる他、青灰色の間層が入る土層である。北の谷の調査区で設定された土層で、土器や石器などの他、骨角器・漆器・木製品・動植物遺体などの有機質遺物がまとまって出土している。先述したとおり、谷の大部分で第Ⅱ層の直下の層として把握されている。第Ⅲ c 層からは、調査した部分では円筒下層 b 式～d 1 式土器が多量に出土した。ただし、西側にある北盛土などからの流れ込みと見られる円筒上層式土器や縄文時代後期以降の土器も散見される。なお、図面などの詳細については次回の報告で触れることにする。

遺物の取り上げに際しては、主な出土遺物の出土地点をトータルステーションを用いて記録し、併せて出土グリッドと層位についても記録している。出土層位については、第Ⅲ層ないし第Ⅲ a 層・第Ⅲ b 層、Ⅲ c 層などの大別層による取り上げを行った部分と、第Ⅲ c 層については、第Ⅲ c - 1・2

… というように細分層名を付して取り上げた部分がある。

(茅野嘉雄)



北の谷 (95 ライン) 上位層の堆積状況 (南から)



V P-91 付近での火山灰検出状況



V P-90 付近での遺物出土状況

### 3. 北の谷出土遺物

#### (1) 土器 (3図～74図)

北の谷からはトロ函にして3600箱以上の土器が出土した。今回の報告では復元品を報告し、土器の出土状況及び破片資料等については次回に報告することとする。以下に土器の分類を示し、層位ごとに記載することとする。土器の分類は以下の通りである。円筒下層式は胎土に繊維を含む。

第Ⅰ群 縄文時代草創期～早期	5類 円筒上層e式に位置づけられるもの
第Ⅱ群 縄文時代前期	6類 1～5類で、時期を特定できないもの
1類 円筒下層a式より古く位置づけられるもの	7類 榎林式以前に位置づけられる大木式土器系のもの
2類 円筒下層a式に位置づけられるもの	8類 榎林式に位置づけられるもの
3類 円筒下層b式に位置づけられるもの	9類 最花式・中の平Ⅲ式に位置づけられるもの
4類 円筒下層c式に位置づけられるもの	10類 大木10式併行に位置づけられるもの
5類 円筒下層d式に位置づけられるもの	11類 8～10類で時期を特定できないもの
さらに2つに細分する 1 d1式	第Ⅳ群 縄文時代後期
2 d2式	1類 十腰内遺跡第Ⅰ群以前に位置づけられるもの
6類 1～5類で時期を特定できないもの	2類 十腰内遺跡第Ⅰ群に位置づけられるもの
第Ⅲ群 縄文時代中期	第Ⅴ群 縄文時代晩期
1類 円筒上層a式に位置づけられるもの	第Ⅵ群 弥生時代
2類 円筒上層b式に位置づけられるもの	
3類 円筒上層c式に位置づけられるもの	
4類 円筒上層d式に位置づけられるもの	

#### 第Ⅲ層出土土器 (3図～11図)

第Ⅲ層は、第Ⅱ層除去後に確認した層位で、第Ⅲ層の細分層が付されず、大まかに第Ⅲ層として捉えられた層位である。円筒下層式～上層式の土器が出土している。円筒下層式土器には繊維が多量に含まれる。

円筒下層b式に比定されるのは3図～6図-1・3である。細長いバケツ形の器形で、口縁部には縄や単軸絡条体などの原体を横位に回転施文している。単軸絡条体には第1類・2類・5類・6A類などが見られる。口縁部と胴部の区画には、隆帯や縄の側面圧痕が使用されている。胴部にはRLRを斜位回転するものや、単軸絡条体第1類を縦位に回転施文するものが目立つ。

円筒下層c式に比定されるのは6図-2・4～8図-1である。細長いバケツ形で、口縁部付近が弱くくびれながら外反するものもみられる。口縁部には結束第1種羽状縄文が横位に回転施文されるものや、縄の側面圧痕による幾何学文様が施文されるものなどがある。前者では原体の上下を替えて施文することで菱形文様が描出されているものもある。加えて波状口縁の波頂部から縦位の側面圧痕が3本1単位で押圧されているものもある。口縁部と胴部の区画には縄の側面圧痕が2本ないし3本施文されているものが見られる。胴部にはRLの斜位回転施文や、単軸絡条体第1類の縦位回転施文な

どがみられる。

円筒下層d1式に比定されるのは8図-2・3である。下層c式に比べると上下がやや寸詰まりな感じを受ける。

9図～11図は円筒上層式土器である。円筒上層a式に比定されるのは、9図1・2・4、10図-1である。4単位の波状口縁を持ち、口縁は外傾し、筒状の胴部を持つものが多い。胎土に繊維は含まれない。口縁部には隆線と縄の側面圧痕が見られる。胴部にはLRや結束第1種羽状縄文などが横位に回転施文されるものが多い。

円筒上層b式に比定されるのは9図-3と11図-1である。口縁部に隆線・縄側面圧痕・馬蹄形縄圧痕が見られる。胴部には結束第1種羽状縄文が見られる。11図-1は台付浅鉢で、ほぼ完形品である。口縁～体部には隆線と馬蹄形縄圧痕による文様が見られ、口縁直下には鋸歯状に貼り付けられた隆線も見られる。台部は楕円形を呈し正面観は高台端部が広がる。体部は正面観が逆台形で、下から見ると横に長い六角形を呈する。正面と対向する面には橋状の把手が付されている。

### 第Ⅲa層出土土器（12図～14図）

第Ⅲa層は北盛土の調査で設定され、北の谷谷頭付近に分布する層である。円筒上層式土器が出土している。12図～13図は円筒上層b式に比定される。4単位の波状口縁に正面観台形あるいは二又状の突起を持つ。口縁部には隆線と縄側面圧痕と馬蹄形縄圧痕が見られ、胴部には結束第1種羽状縄文が施文されている。14図-1は浅鉢形土器である。上面観は楕円形で、側面から見ると実測図右側に向かって口縁が緩やかに傾斜している。体部には縄の側面圧痕が見られ、長軸端部には橋状の突起が付されている（実測図左側のものは欠損）。底面には縄目編みの圧痕が見られる。円筒上層a式に比定される。

### 第Ⅲb層出土土器（15図～28図）

第Ⅲb層は北盛土で把握された層であり北の谷谷頭付近に分布する。主に円筒下層式土器が出土している。

円筒下層a式に比定されるのは15図-1である。胎土に繊維を含み、バケツ形の器形である。口縁部には結節回転文が施文されている。

円筒下層b式に比定されるのは15図-2～20図-1・4である。バケツを縦に引き延ばしたような細長い器形で、胎土には繊維を多量に含んでいる。口縁部には縄や絡条体の原体が横位に回転され、その後縄の圧痕が横位・縦位に施文されるものが見られる。横位回転施文に使用される原体には、結節・RLR・単軸絡条体第1類・第5類・単軸絡条体第6A類・多軸絡条体などがある。まれに16図-3のように貝殻による横位の条痕なども見られる。押圧に用いられる原体には、RやL・LR・RLRが見られる。口縁部と胴部との区画には隆帯や縄の圧痕が用いられ、胴部には縄や単軸絡条体が斜位・縦位に回転され縦方向の条を描出することが多い。縄の種類には、RLR・RL・LLRなどが見られる。

円筒下層c式に比定されるのは20図-2・3・21図～25図-3・27図-2である。器形は円筒下層b式ほど細長くないものが多い。口縁部が弱く外反するものも見られる。口縁部には地文として縄（結束第1種羽状縄文が多い）が横位回転施文されるものが目立ち、その後波状口縁波頂部直下に縦位

の縄押圧が3本1組で施文されるものもみられる。このような下層b式に近い特徴を持つものと、無文地に縄の押圧で幾何学文様を描出するものもみられる。文様の構成としては、口縁波頂部を頂点とした山形文様や菱形文様がよく見られる。口縁部と胴部の区画には、2本～3本一組の縄の押圧のほか、何もなされないものも見られる。胴部文様はRLRが斜位に回転されるもの、結束第1種羽状縄文等がよく見られる。

円筒下層d1式に比定されるのは、25図-4～27図-1・3である。下層c式より上下に寸詰まりな器形もつ。口縁部の文様帯は幅が狭く、上下につぶれた菱形・山形・平行線などの文様がR・自条自巻きなどの押圧で描出される。口縁部と胴部の区画には、縄の押圧の他、微隆帯などが用いられる。胴部にはRLR・結束第1種羽状縄文・単軸絡条体第1類などが回転施文されるが、口縁直下とそれ以下で原体や回転方向を変えて施文している場合が少なからず見られる。

円筒上層式に比定されるのは28図の土器である。28図1は円筒上層c式、他は円筒上層b式土器である。

### 第Ⅲc層出土土器（9図～50図）

第Ⅲc層は、谷の中央から北側の第Ⅱ層の下位で確認されている。円筒下層a式～円筒上層式が出土しているが、主体となるのは円筒下層b～c式土器である。

円筒下層a式に比定されるのは29図・30図-1・4である。胎土に繊維を含み、バケツのような器形を持つ。器壁は1センチ弱と厚い。口縁部には結節や絡条体などが横位に回転施文される。区画には隆帯が用いられることがある。胴部にはRLRが横位に回転施文されることが多い29図-4の外底面にはRLRが回転施文されている。

円筒下層b式土器に比定されるのは、30図-2・4・31図～39図-1である。

上下に細長いバケツ形のものや、やや寸詰まりの器形もみられる。胎土に繊維を含む。口縁部には、縄や絡条体が横位に回転施文されるものがほとんどで、RLRなどの縄や単軸絡条体第1類・4類・5類・6類などが使用される。文様体の上下はRLRなどのやや太めの縄で縁取られることも多い。区画には縄の押圧の他、隆帯も用いられる。胴部にはRLRなどが斜位に回転される他、単軸絡条体第1類を縦位に回転するなどして条を縦位に描出しているものが多く見られる。

円筒下層c式に比定されるのは39図2～46図・47図-1・3、48図-1である。第Ⅲb層から出土したものと同様、口縁部にLR・RLR・結束第1種などを横位回転施文したものと、無文地に縄押圧で幾何学文様を描出したものが見られる。器形4単位の波状口縁や平口縁の深鉢の他、台付深鉢、鉢形、浅鉢などが見られる。区画には縄押圧の他隆帯も見られる。46図-3は上面観が長方形の浅鉢である。底部は四角く、口縁部はやや丸みを帯びている。胎土には繊維を多量に含む。口唇端部上面にはRLが回転施文され、体部にもRLが横位に回転施文されている。全体の形状は編み籠などが模倣された可能性もある。

円筒下層d1式に比定されるのは、48図-2～49図4である。

円筒上層式に比定されるのは49図-5～50図-1である。50図の1は円筒上層b式の台付き浅鉢である。高台部分には円形と楕円形の透かしがみられる。口縁部は欠損しており、体部には縄押圧と馬蹄形押圧が見られる。

最花式に比定されるのは50図-2である。また、50図-3は時期が判別しがたい。

### 第Ⅲc-2層出土土器 (51図)

円筒下層式土器と上層式土器が出土している。円筒上層b式土器に比定されるのは51図-2である。平口縁の深鉢形で、1の口縁部には隆線と縄押圧・馬蹄形縄押圧による文様が見られる。1・2ともに胴部には結束第1種が横位に回転施文されている。3は無文の浅鉢である。上面観は楕円形、側面観は逆台形を呈する。

### 第Ⅲc-3層出土土器 (52図～60図)

主に円筒下層式土器が出土しており、特に円筒下層c式とd1式が多く出土している。

円筒下層b式に比定されるのは52図-1・2である。バケツを細長くした器形を持ち、胎土に繊維を多量に含む。1の口縁部には結束第1種羽状縄文が施文され、文様体上部にRLRが2本束で押圧されている。区画には隆帯が用いられ、隆帯裾と上面にRLRが押圧される。胴部にはRLRが斜位に回転施文されている。底部外面にはRLRが回転施文されている。

円筒下層c式に比定されるのは52図-3～54図-2、55図-2・4、57図-2である。やや細く伸びたバケツ形の器形をもち、口縁部付近で弱く外反するものが多い。口縁は波状・平縁があるが、波状の場合4単位が普通である。第Ⅲc層で触れたとおり、口縁部に結束第1種羽状縄文などが回転施文されるものと、無文地に縄の押圧による幾何学文様が描かれるものがある。区画帯には縄の押圧が2本ないし3本一組で用いられることが多い。胴部にはRLやRLRを斜位に回転施文するものも多く、区画帯直下に結束第1種を1段帯状に施文するものも特徴的である。

円筒下層d1式に比定されるのは54図-3・55図-1・3、56図・57図1・3、58図～60図-1である。円筒下層c式より上下にやや寸詰まりな器形をもち、胎土に繊維を多量に含んでいる。口縁には4単位の波状口縁と平口縁が見られる。口縁部には無文地に縄の押圧による文様が描かれることが多い。押圧に使用される原体には1段や2段の縄の他、自条自巻きが使用されることが多い。文様体を持たないものについては、結束第1種などが横位多段に施文されるものなどがある。文様体の区画には微隆帯や2本ないし3本一組の縄の押圧が用いられる。区画帯直下には結束第1種羽状縄文が狭い幅で1段ないし2段帯状に施文されることがある。胴部にはRLRや単軸絡条体第1類による縦走する条が見られることが多い。

### 第Ⅲc-4層出土土器 (60図～69図)

円筒下層a式～円筒下層d1式が出土している。

60図-2は円筒下層a式に比定される。2単位の波状口縁をもつバケツ形の器形で、口縁部にはLRの押圧がみられる。胎土には繊維を多量に含んでいる。

円筒下層b式に比定されるのは60図-3～64図-1・3、65図-2である。胎土に繊維を含み、バケツを上下に引き延ばしたような細長い深鉢形の器形を持つ。口縁は4単位の波状口縁や平口縁がみられる。口縁部にはRL・RLRや結束第1種などの縄や単軸絡条体第1類・第2類、多軸絡条体などが横位に回転施文される。地文施文後、4単位ないし8単位の間隔で縦位に縄の押圧が施されるものもある。文様体の区画には縄の押圧が用いられている。胴部にはRLやRLR、単軸絡条体第1類を回転施文することで条が縦走しているものが多い。

円筒下層c式に比定されるものは64図-2・65図-1・3・4、66図-1・2・4、68図-5である。第Ⅲc-3層と同様、口縁部が地文地に縄押圧のものと、無文地に縄押圧が見られるものがある。胴部文様も条が縦走するものが多い。68図-5は胴部が膨らみを持ち、口縁部が外反する器形を持つ。また、底部には高台が付いている。口縁部にはRLRが横位に回転施文され、胴部にはRLRが斜位に回転施文されている。

円筒下層d1式に比定されるものは66図-3、67図である。胎土に繊維を含み、器形は上下にやや寸詰まりのバケツ形である。口縁部文様や区画、胴部文様については第Ⅲc-3層出土のものと同様な特徴を持っている。

69図-3は内外面ともに赤彩された台付鉢形土器である。上面観は口縁部がほぼ円形、底部はややひしゃげた円形である。胴部から口縁部にかけて弱く外反する器形を持つ。胎土には繊維を多量に含んでいる。高台部はほぼ垂直に立っており、高台内面は焼成時の状況から黒く変色している。赤彩の色素材については、本遺跡の特別研究において赤沼英男氏が分析しており、ベンガラではなく「赤色粘土状物質」であるとしている。

### 第Ⅲc-5層出土土器（70図～74図）

円筒下層a式～円筒下層c式、円筒上層式土器が出土している。

円筒下層a式に比定されるのは70図-1・2である。口縁部には結節回転文がみられ、胴部にはRLRが横位に回転施文されている。2は区画帯に隆帯が用いられている。

円筒下層b式に比定されるのは70図3～5、71図～72図である。その中で、70図のものは本遺跡第6鉄塔地区第Vc層出土土器と特徴が似ているため、下層b式の前半に位置づけられる可能性がある。器形はやや口縁部が開き気味のバケツ形で、口縁部には単軸絡条体第5類が横位に回転施文されている。3の口縁部には同じ5類でも2本束のものが2度巻きされたものが用いられている。文様区画帯には隆帯が用いられている。71図・72図は第6鉄塔地区第Vb層出土土器に特徴が似ているため、下層b式後半に位置づけられる。前半より全体に上下に伸びた器形となり、口縁部には単軸絡条体が横位に回転施文されるものが多い。地文施文後、文様帯上端に沿う縄押圧と、縦位の縄押圧が4単位ないし8単位で施文されるものがある。押圧に使用される原体は3段の縄が特徴的である。

円筒下層c式に比定されるのは73図である。やや上下に細長い器形をもち、口縁部は弱く外反する。口縁部には結束第1種・単軸絡条体第6類が横位に回転施文されている。区画には2本か3本一組の縄の押圧が用いられている。胴部には単軸絡条体第1類やRLRが回転施文され、条が縦走している。

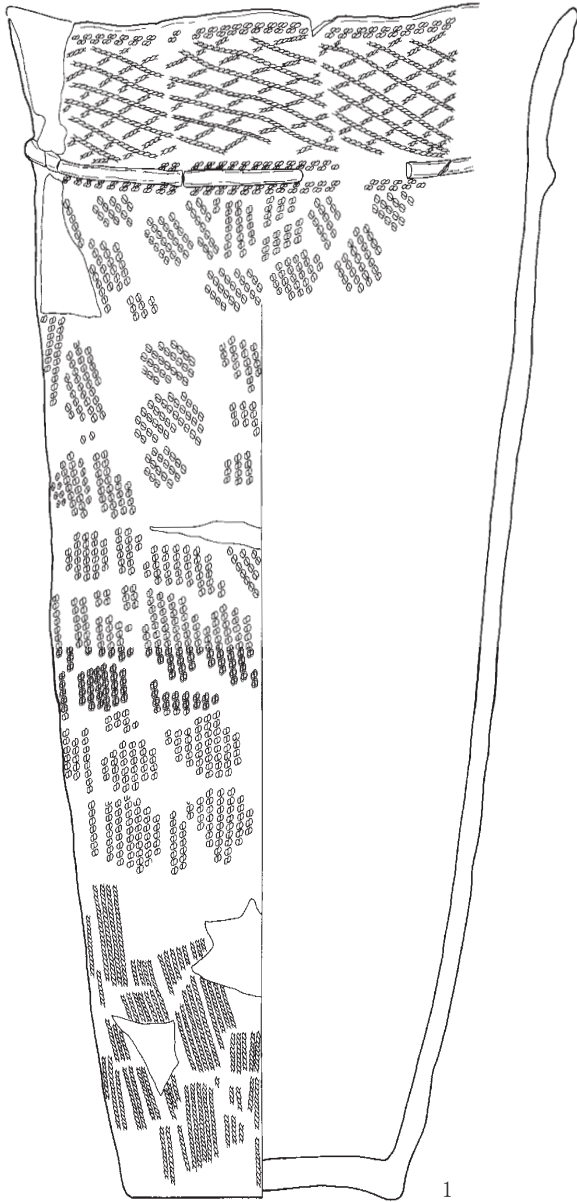
74図-1は円筒下層d1式に、74図-2は円筒上層a式にそれぞれ比定される。

### 第Ⅲc-6層出土土器（74図）

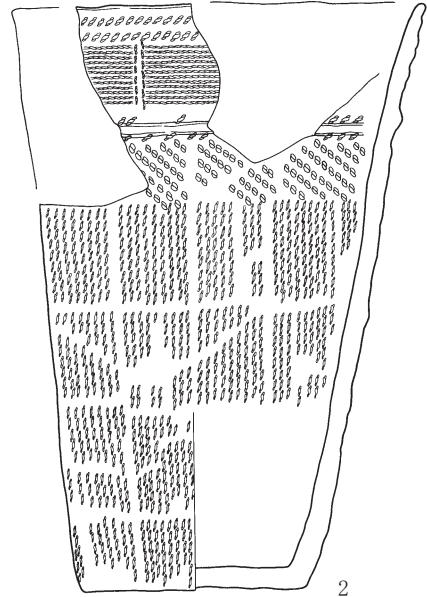
1点を図示した。円筒下層b式に比定される。バケツ形の器形を持ち、口縁部は2個一対の緩い山形をもつ波状口縁で、単位数は不明である。口縁部には単軸絡条体第1類が横位に回転施文された後、文様体上下端部にRLRが押圧され、下端部のものは胴部文様との区画となっている。胴部には単軸絡条体第1類が縦位に回転施文されている。胎土には繊維を多量に含んでいる。（茅野嘉雄）



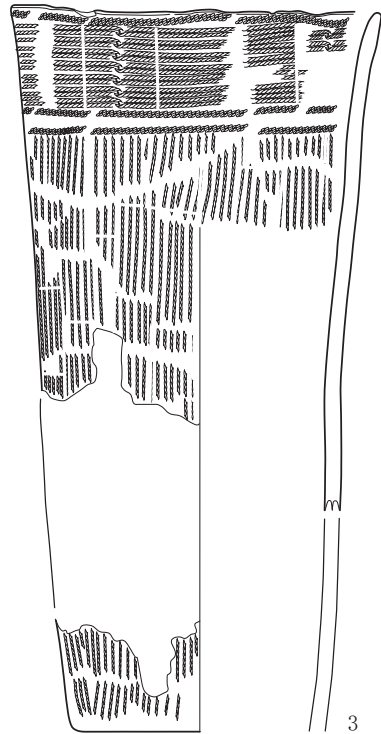
3 図 北の谷出土土器（Ⅲ層）



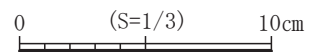
1



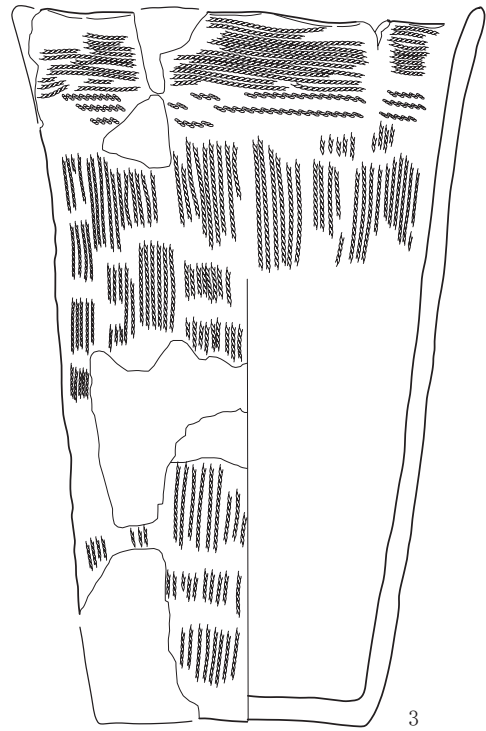
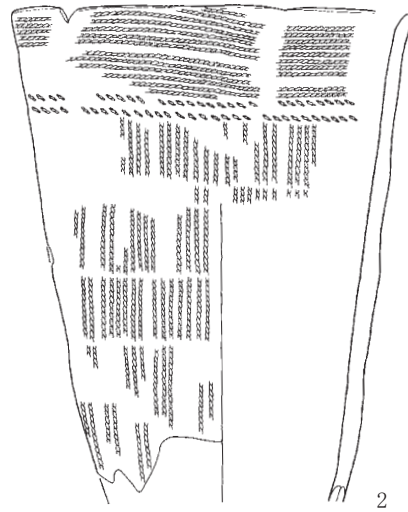
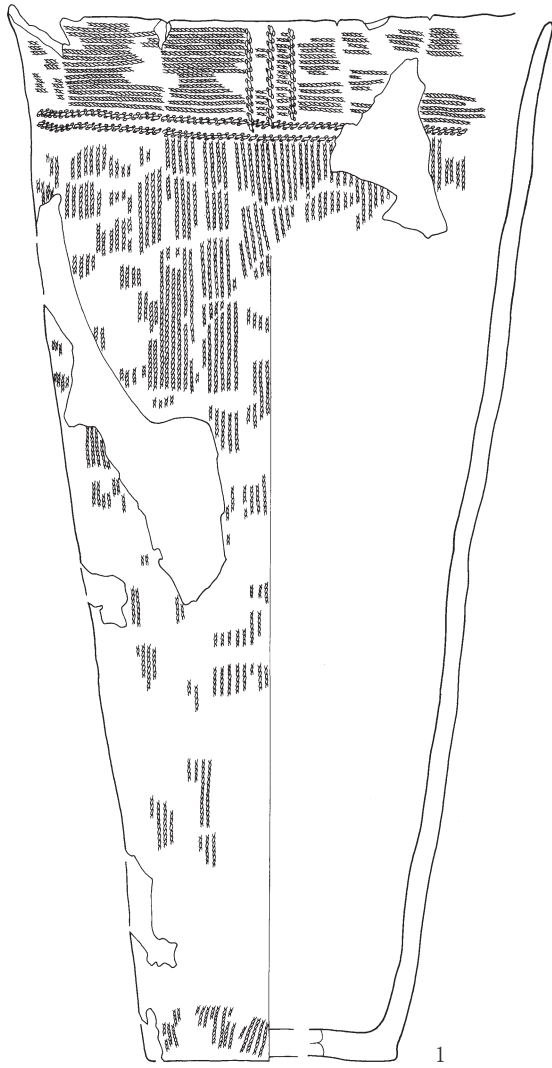
2



3

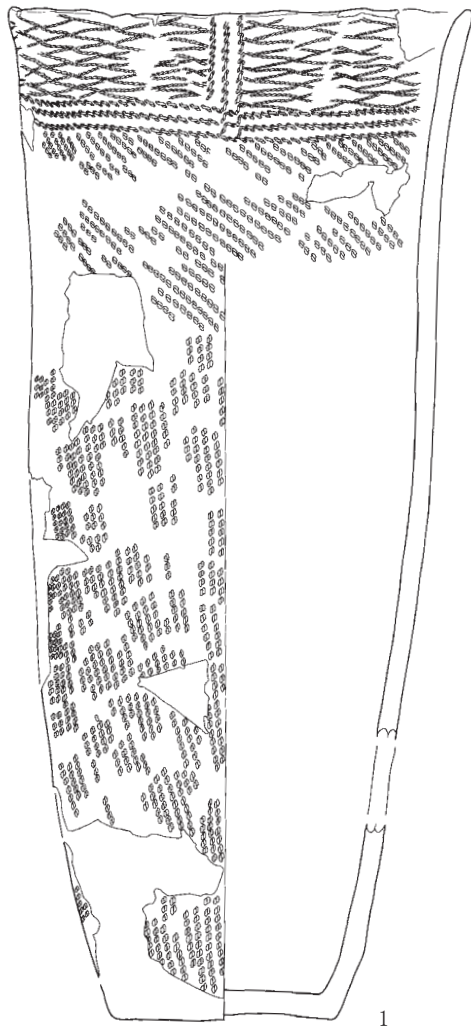


4 図 北の谷出土土器 (Ⅲ層)

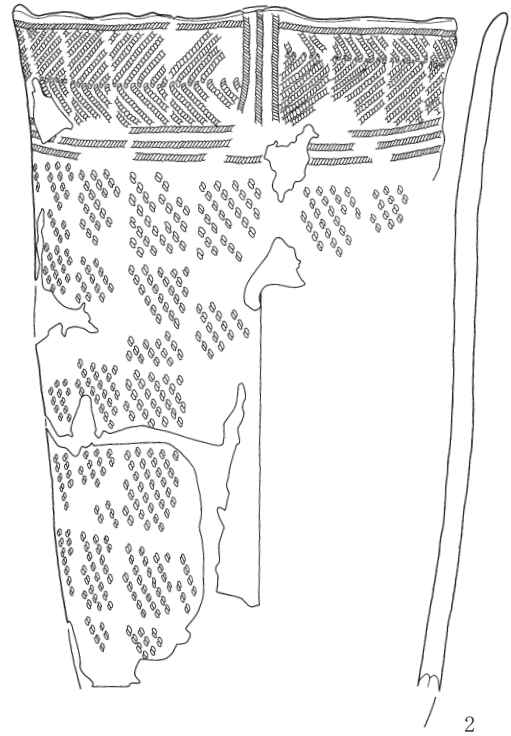


0 (S=1/3) 10cm

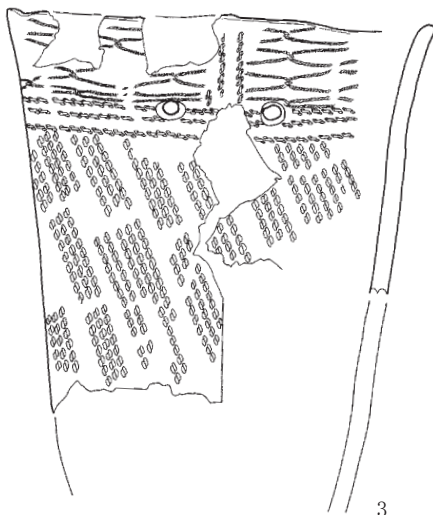
5 図 北の谷出土土器（Ⅲ層）



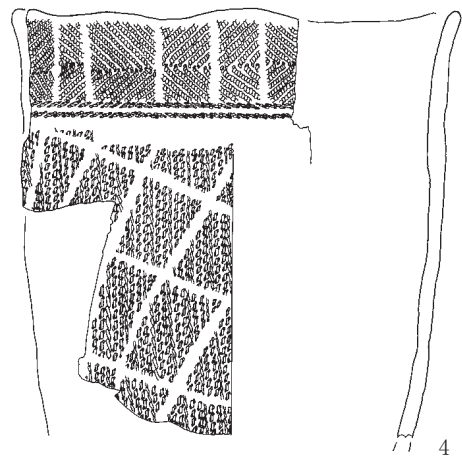
1



2



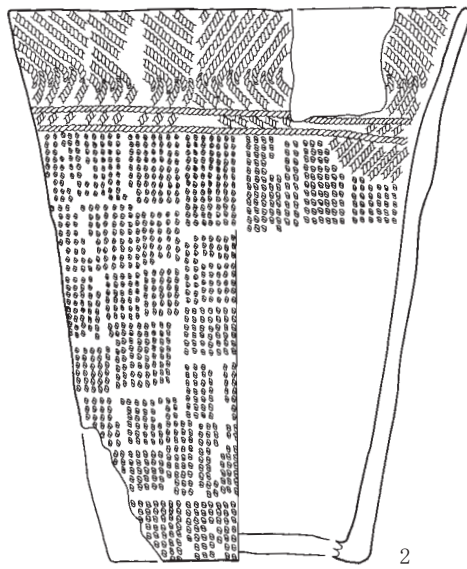
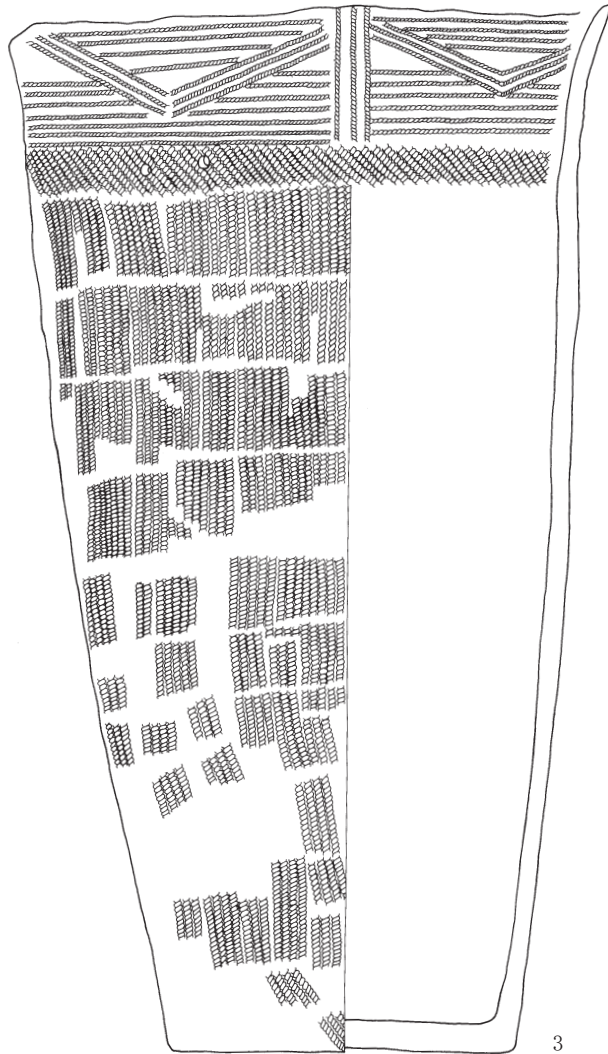
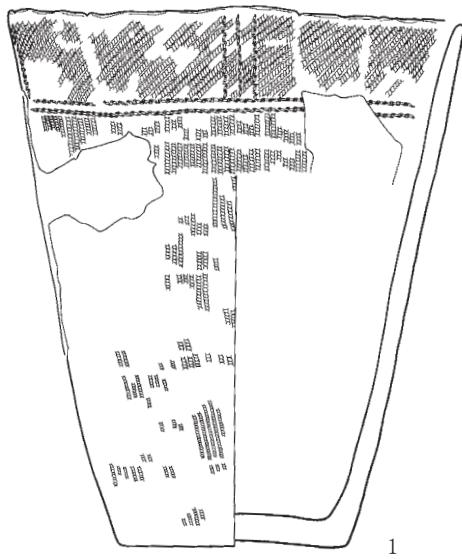
3



4

0 (S=1/3) 10cm

6 図 北の谷出土土器 (Ⅲ層)

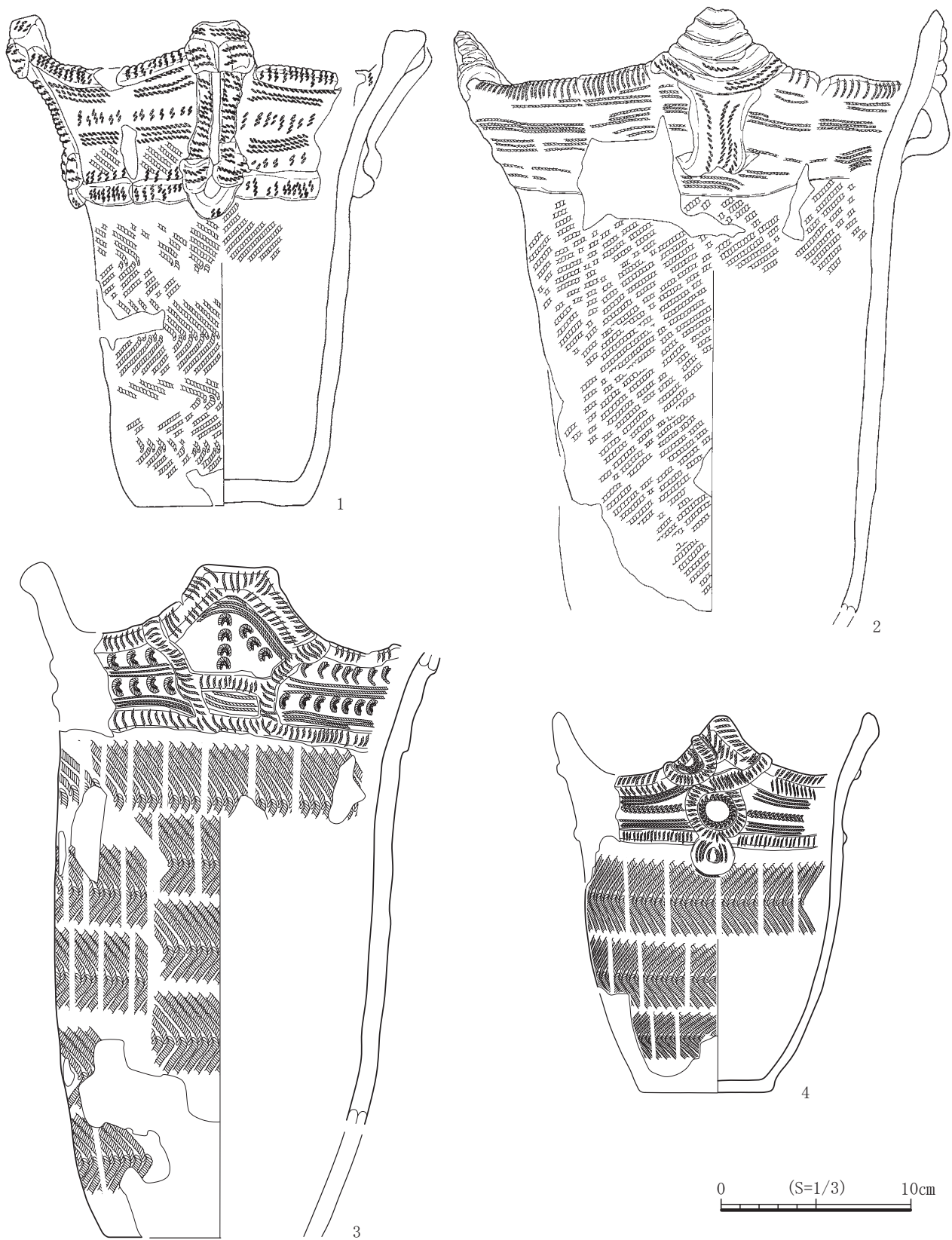


0 (S=1/3) 10cm

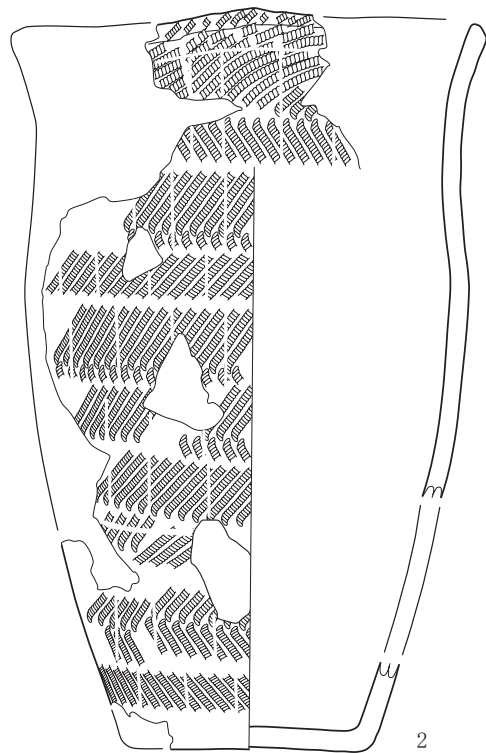
7図 北の谷出土土器（Ⅲ層）



8 図 北の谷出土土器（Ⅲ層）

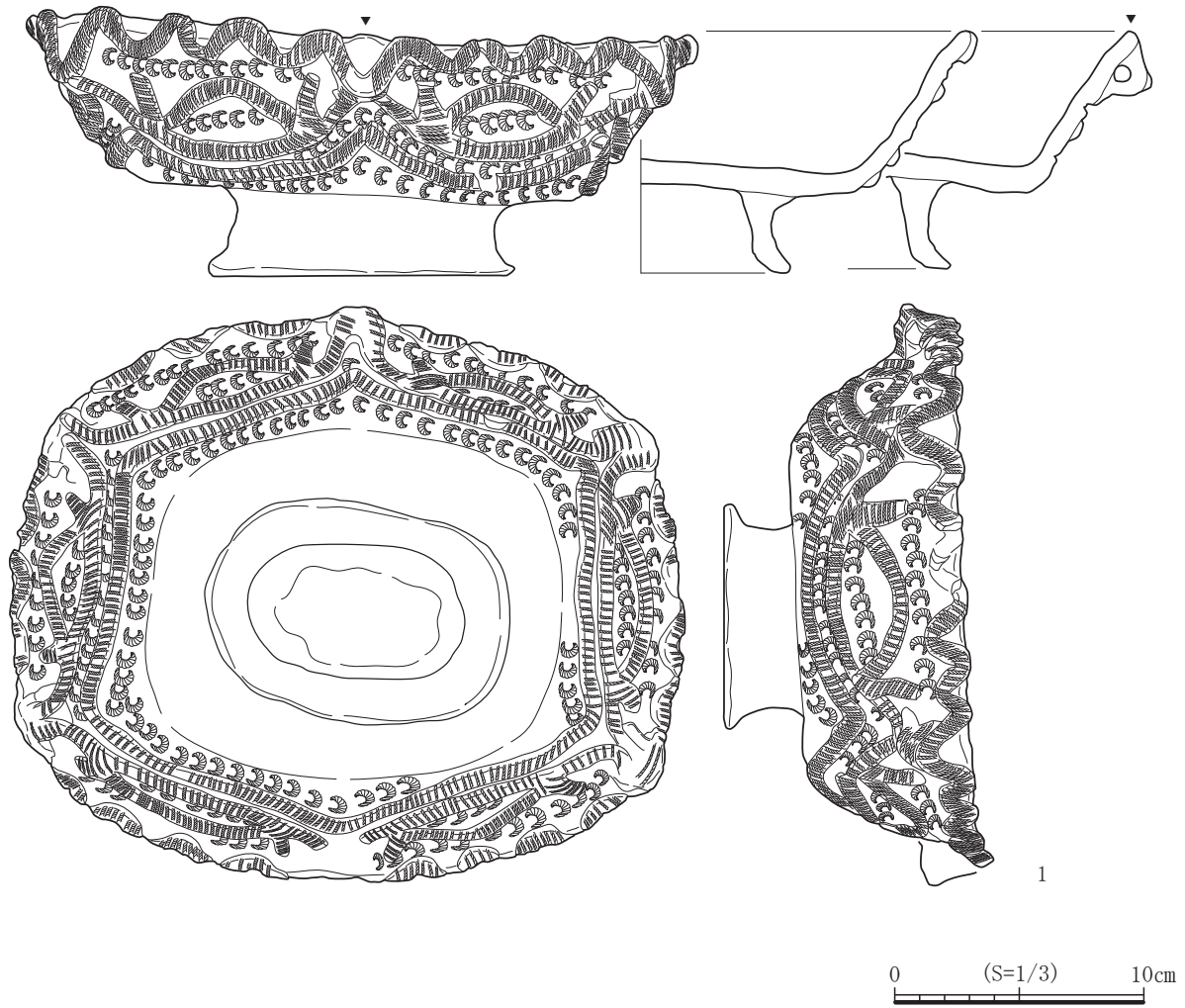


9 図 北の谷出土土器 (Ⅲ層)

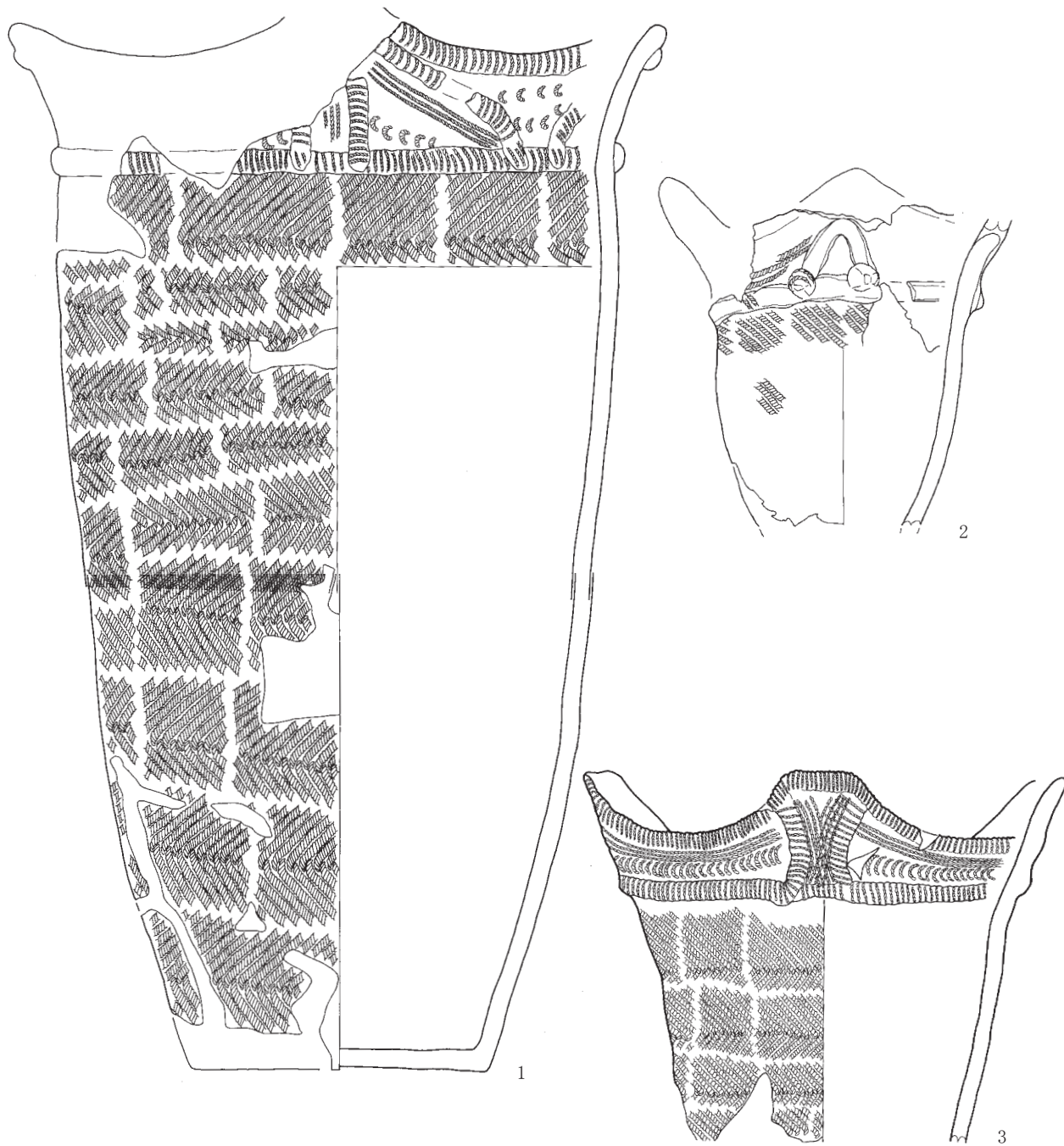


0 (S=1/3) 10cm

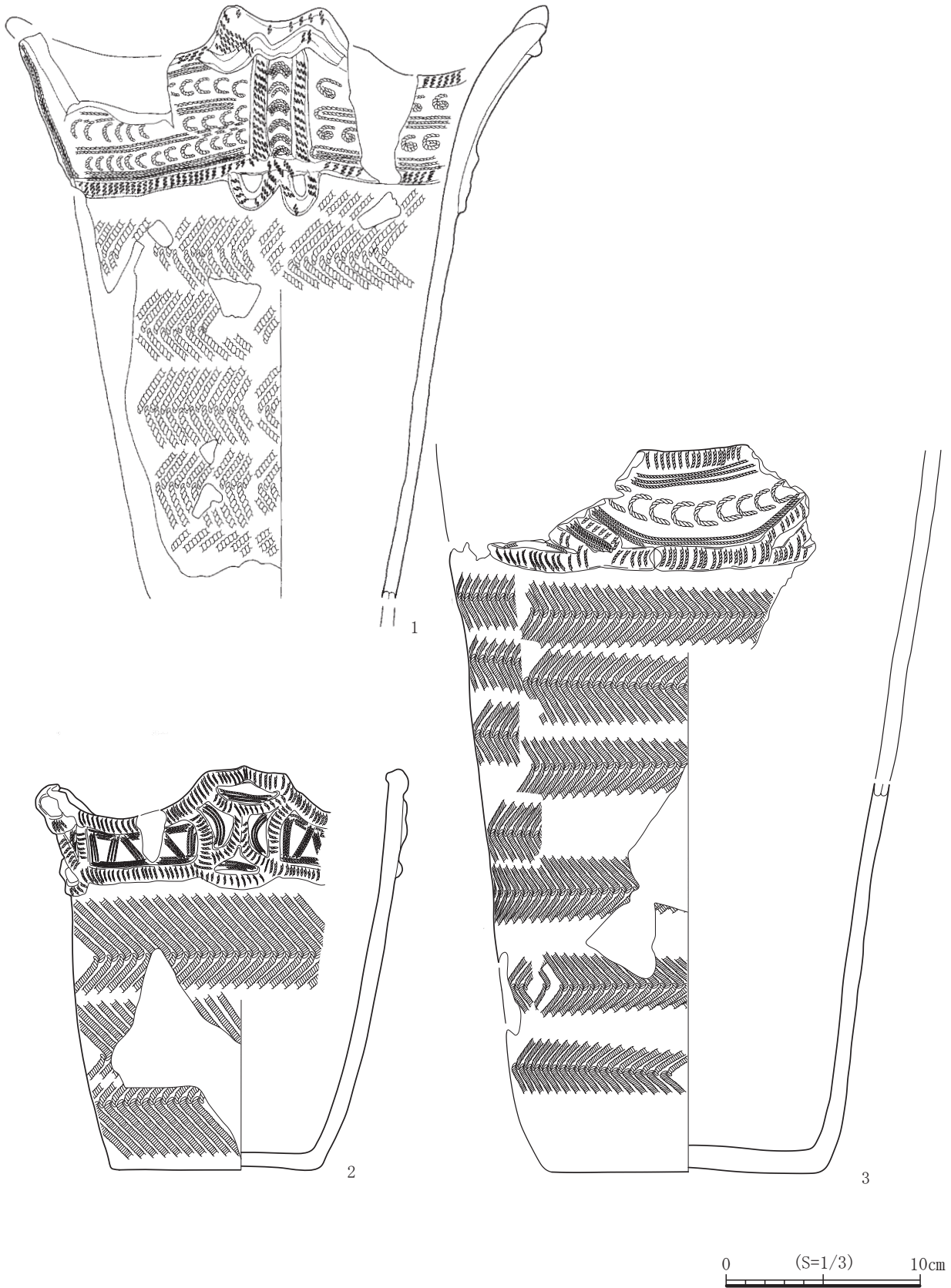
10図 北の谷出土土器（Ⅲ層）



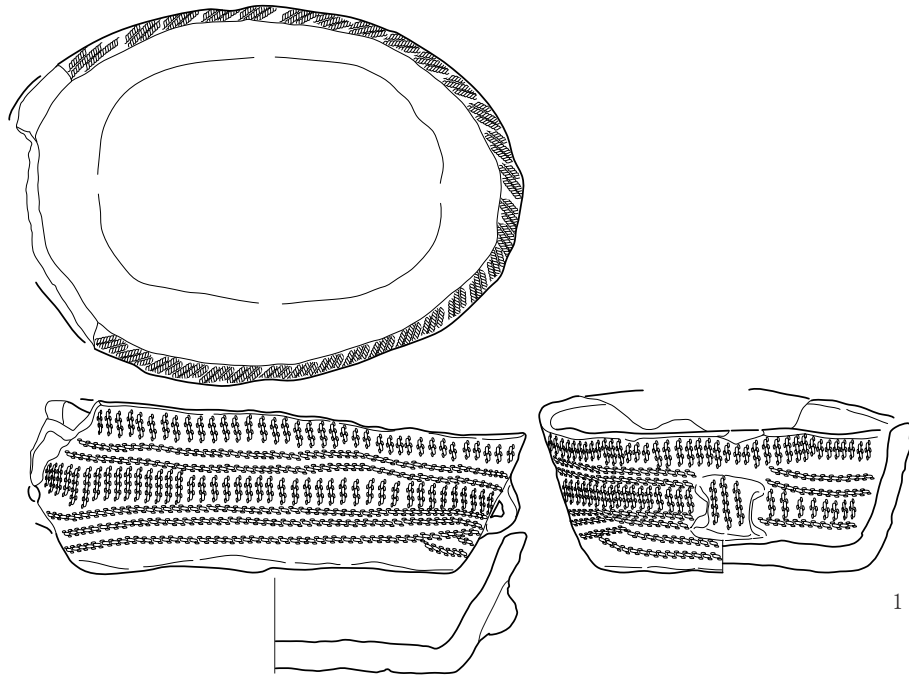
11図 北の谷出土土器（Ⅲ層）



12図 北の谷出土土器 (Ⅲ a 層)

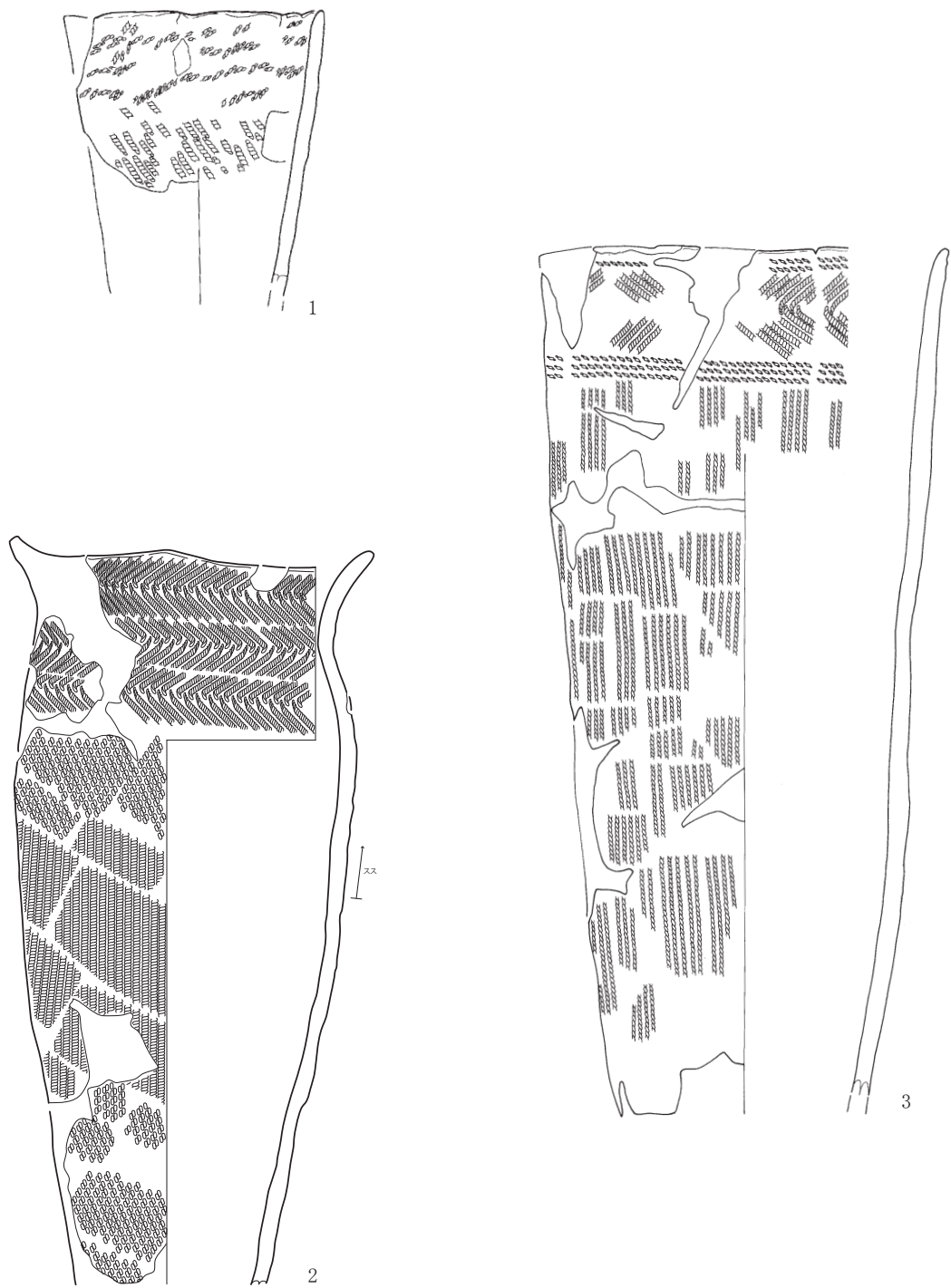


13図 北の谷出土土器 (Ⅲ a 層)

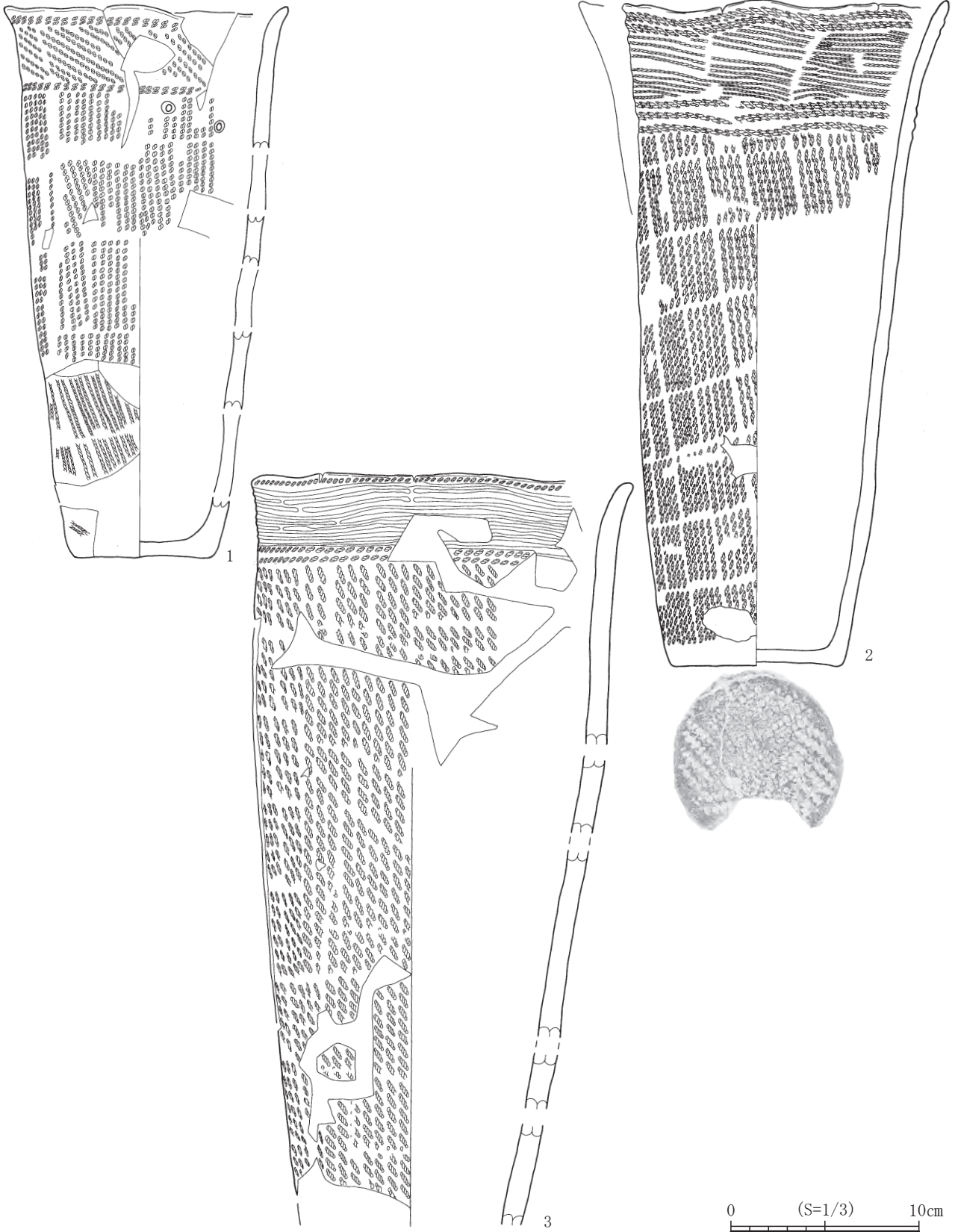


0 (S=1/3) 10cm

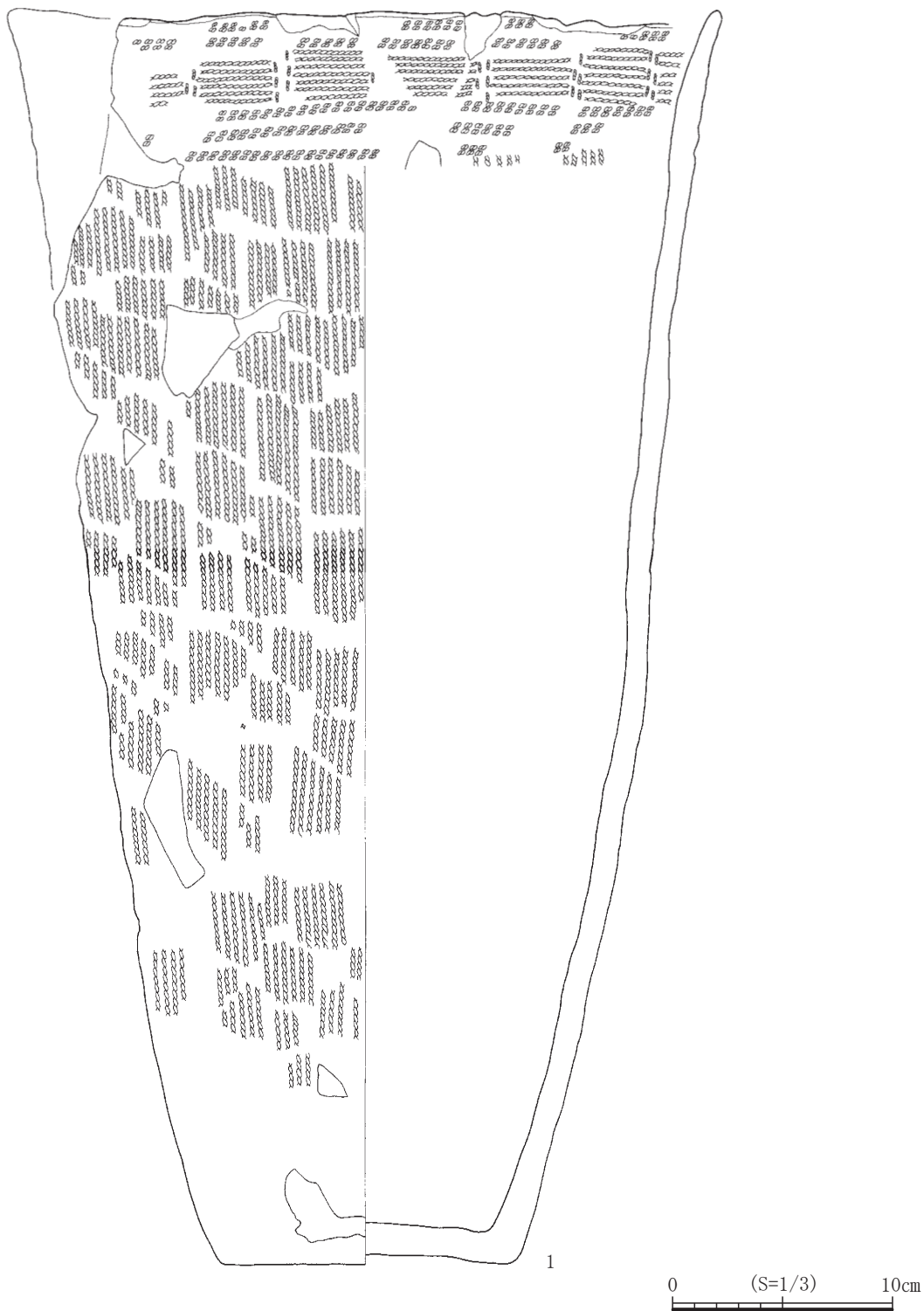
14図 北の谷出土土器 (Ⅲ a 層)



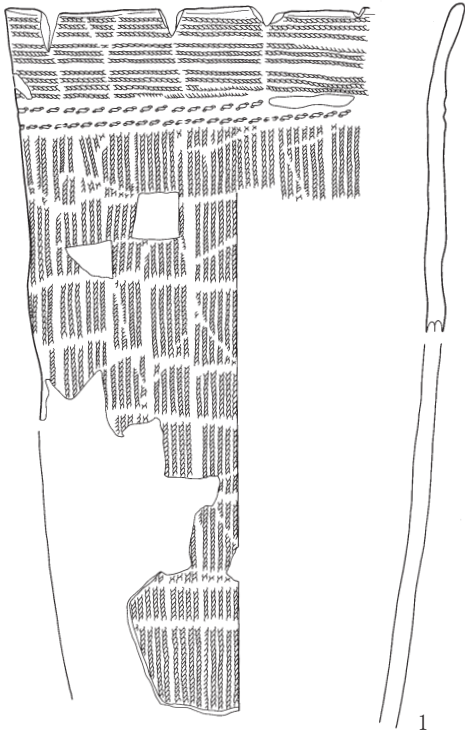
15図 北の谷出土土器 (Ⅲ b 層)



16図 北の谷出土土器 (Ⅲ b 層)



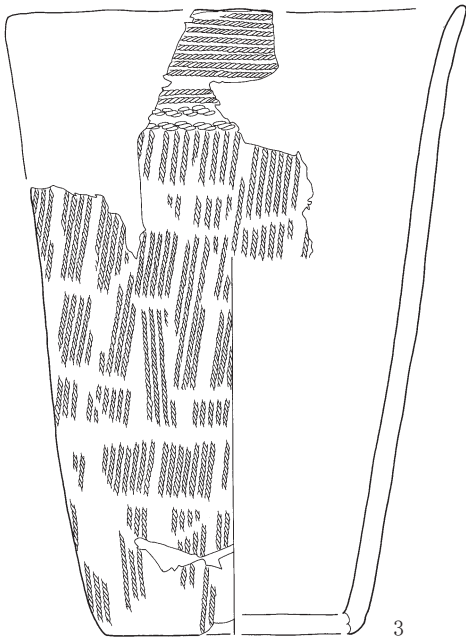
17図 北の谷出土土器 (Ⅲ b 層)



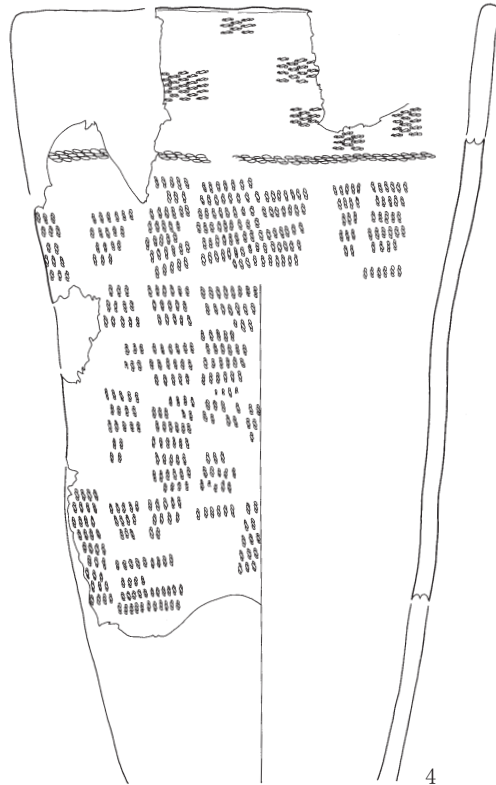
1



2



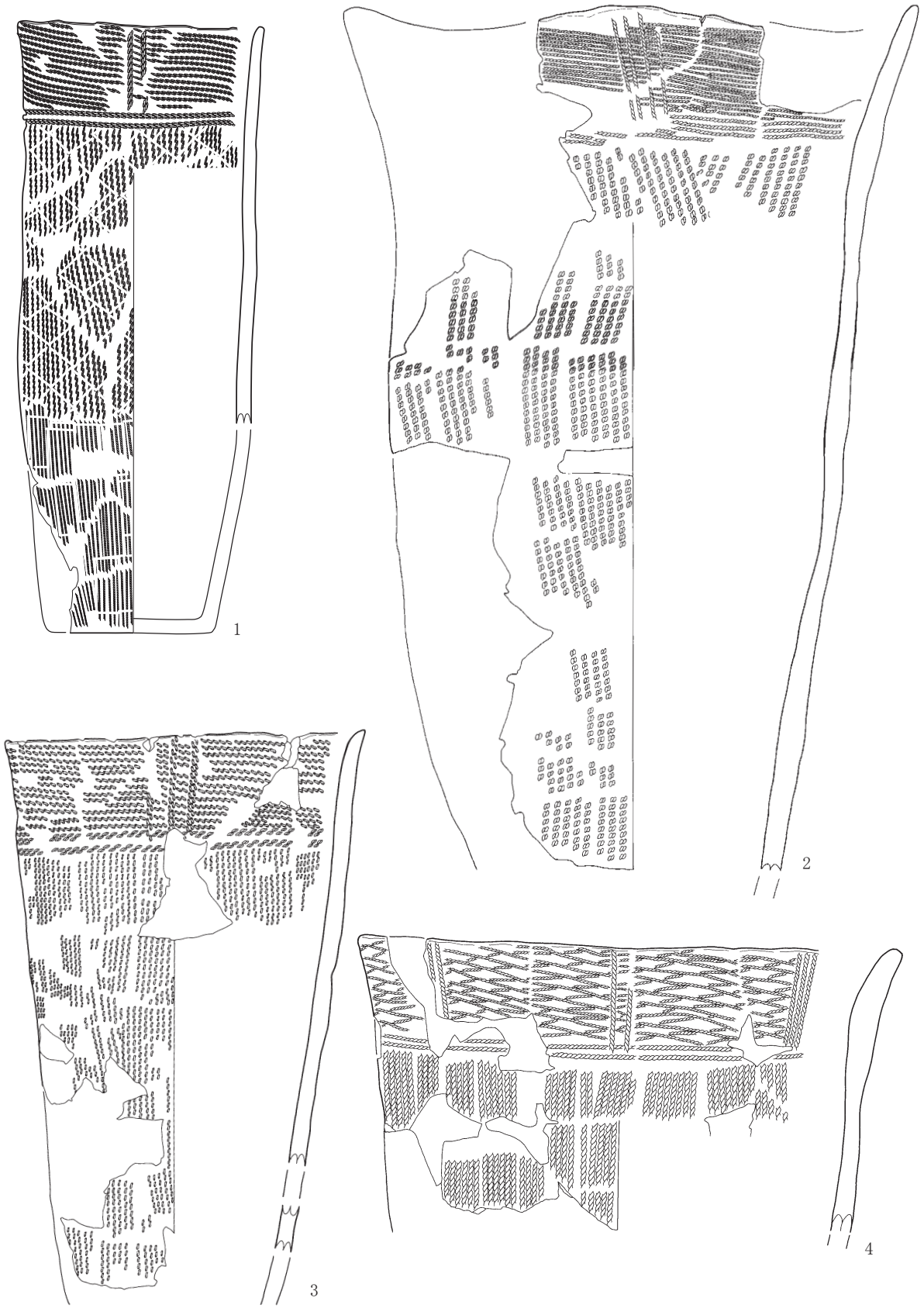
3



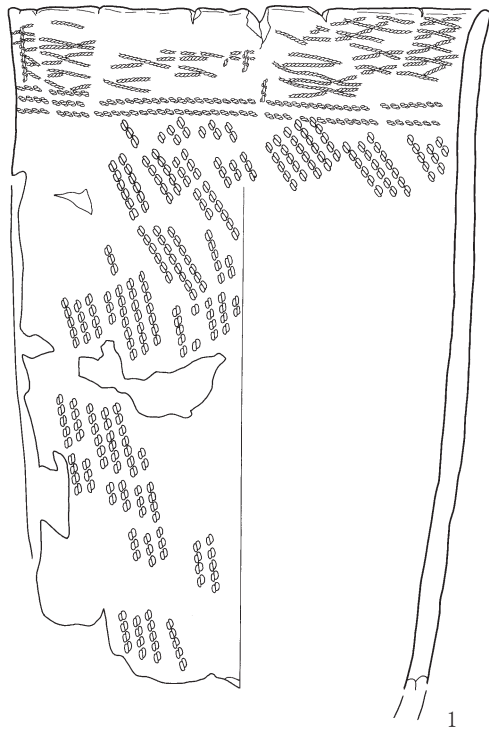
4

0 (S=1/3) 10cm

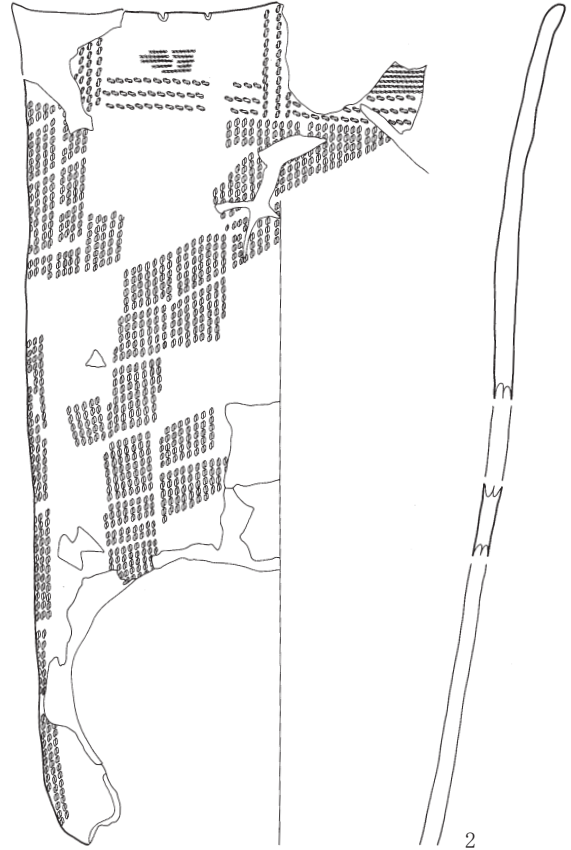
18図 北の谷出土土器 (Ⅲ b 層)



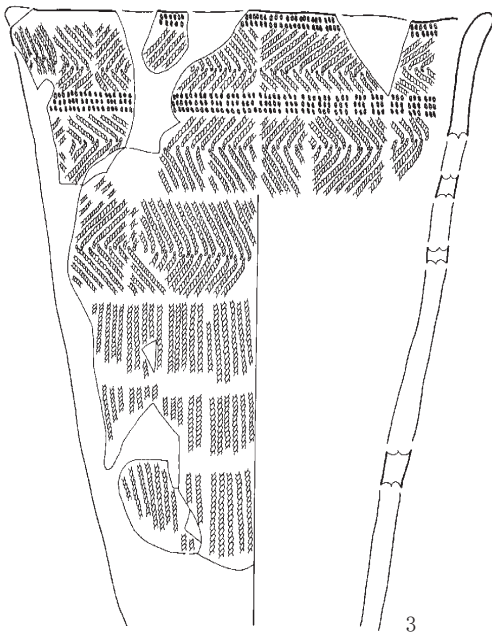
19図 北の谷出土土器 (Ⅲ b 層)



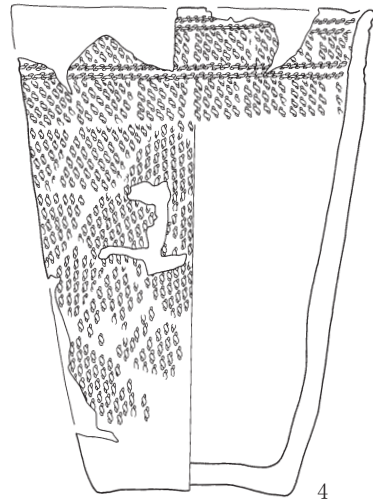
1



2



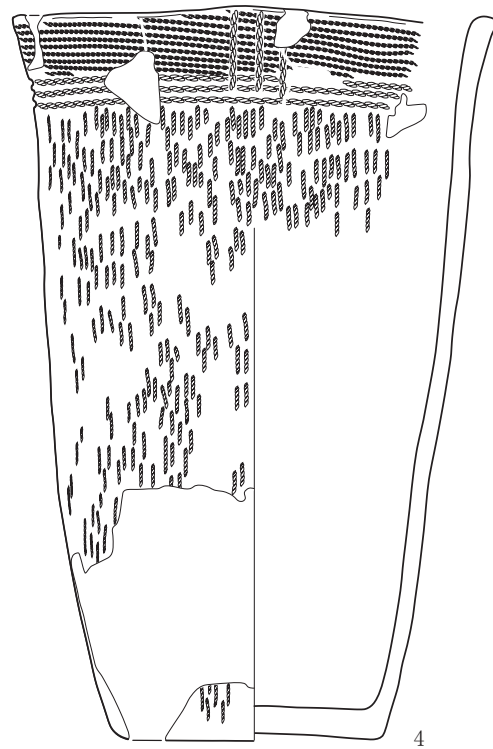
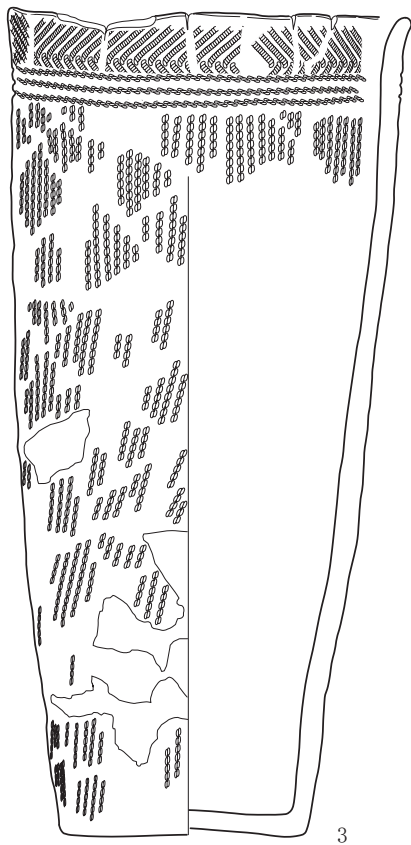
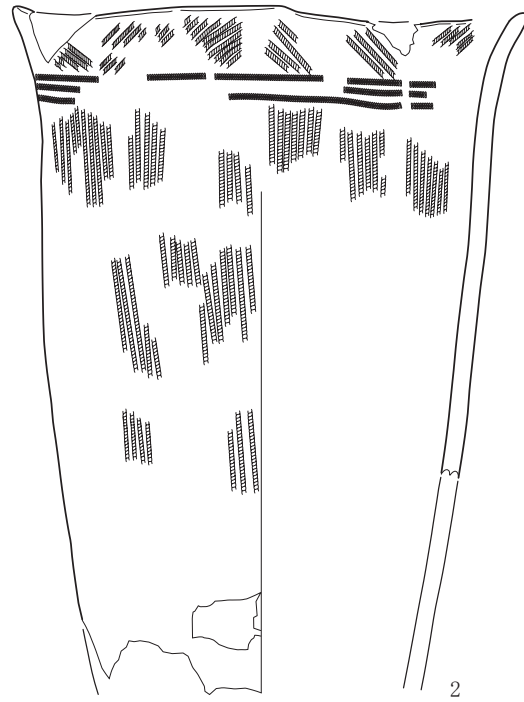
3



4

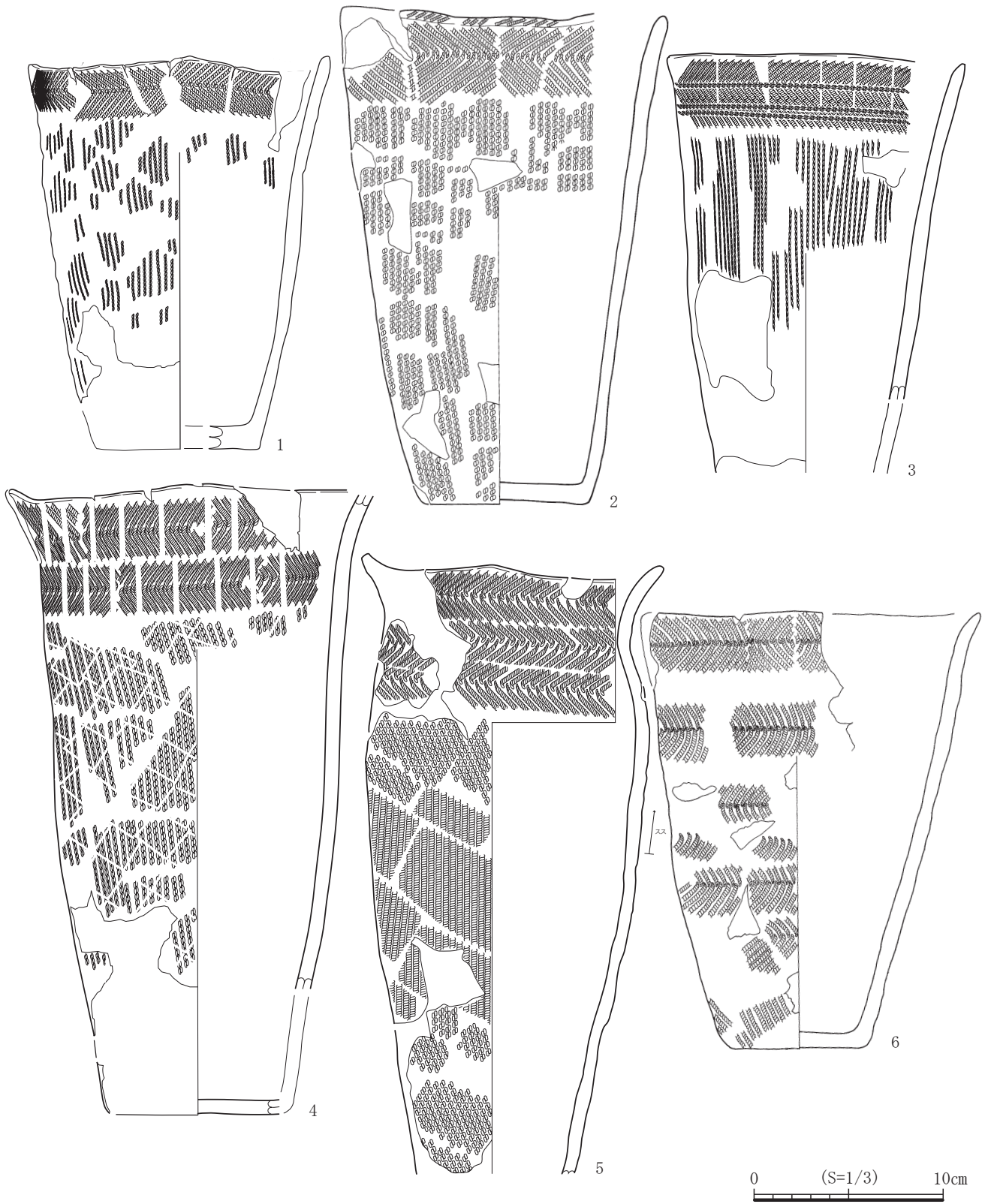
0 (S=1/3) 10cm

20図 北の谷出土土器 (Ⅲ b 層)

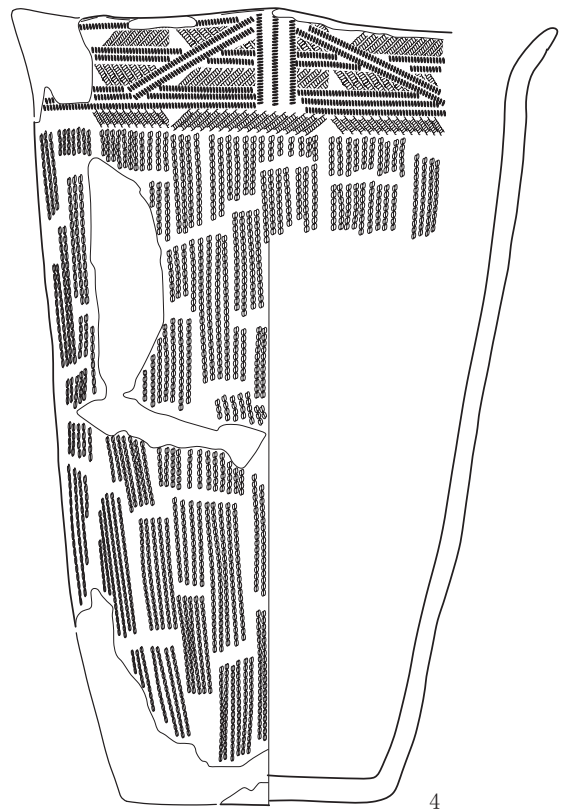
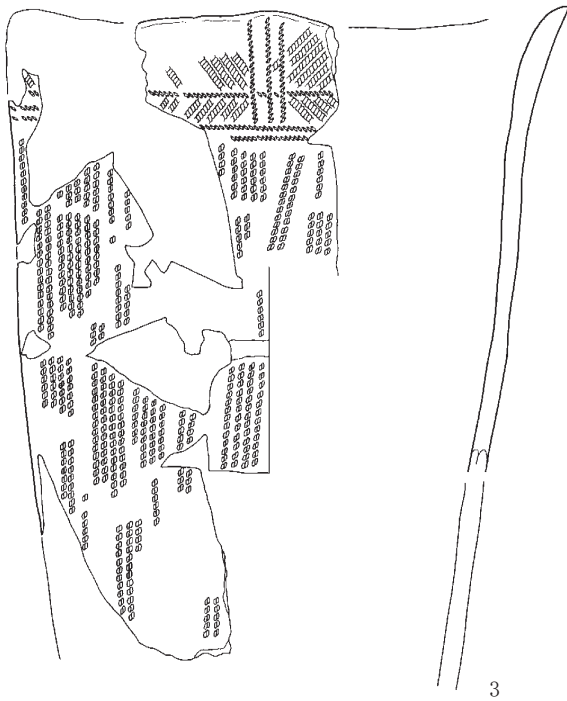
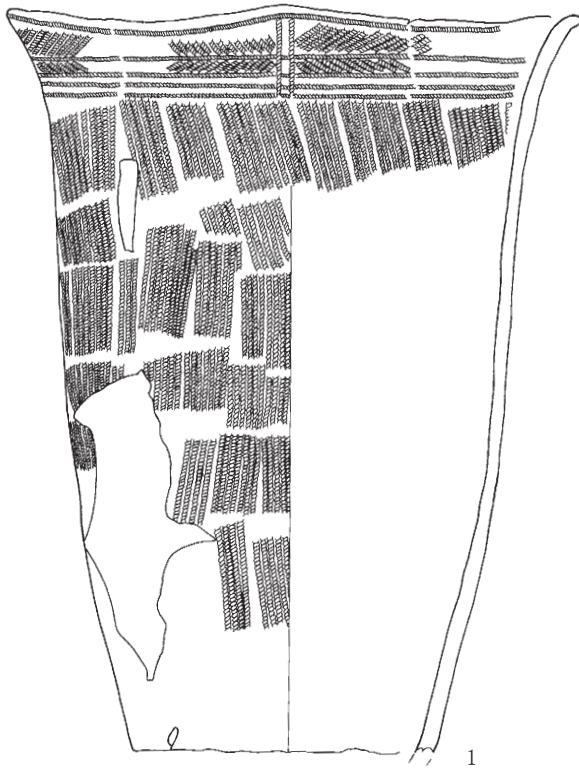


0 (S=1/3) 10cm

21図 北の谷出土土器 (Ⅲ b 層)



22図 北の谷出土土器 (Ⅲ b 層)

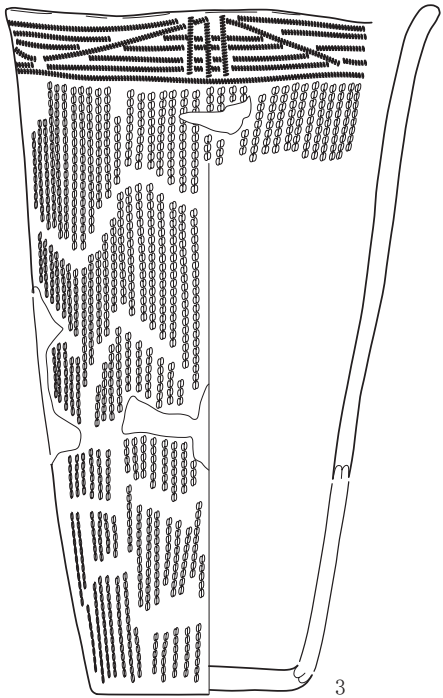
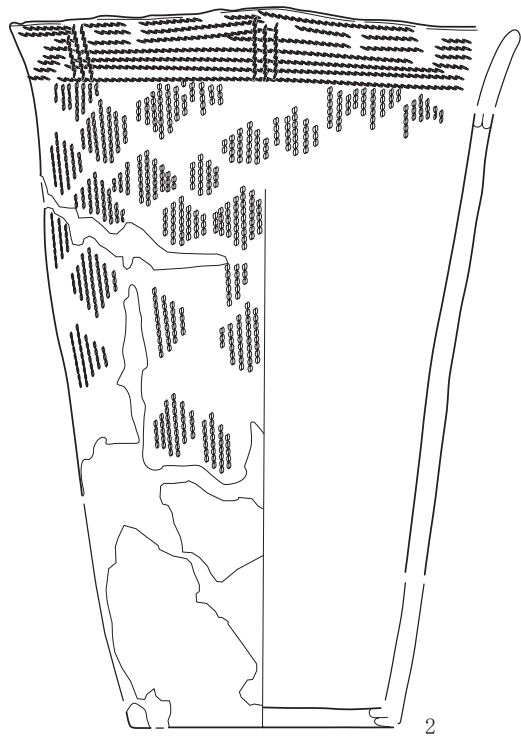
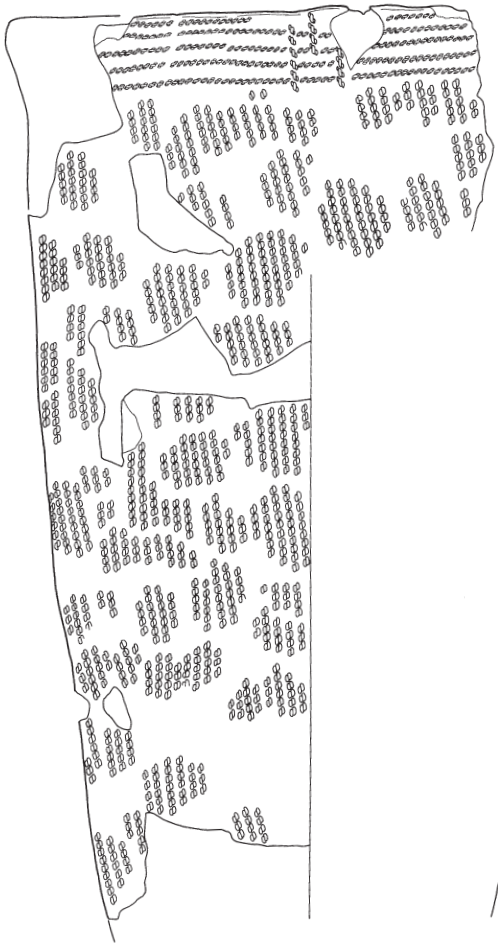


0 (S=1/3) 10cm

23図 北の谷出土土器 (Ⅲ b 層)



24図 北の谷出土土器 (Ⅲ b 層)



0 (S=1/3) 10cm

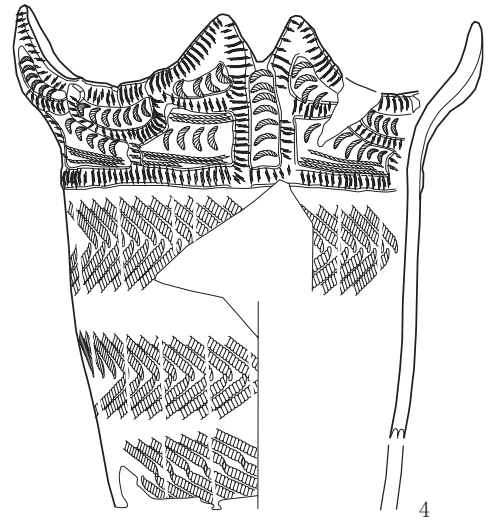
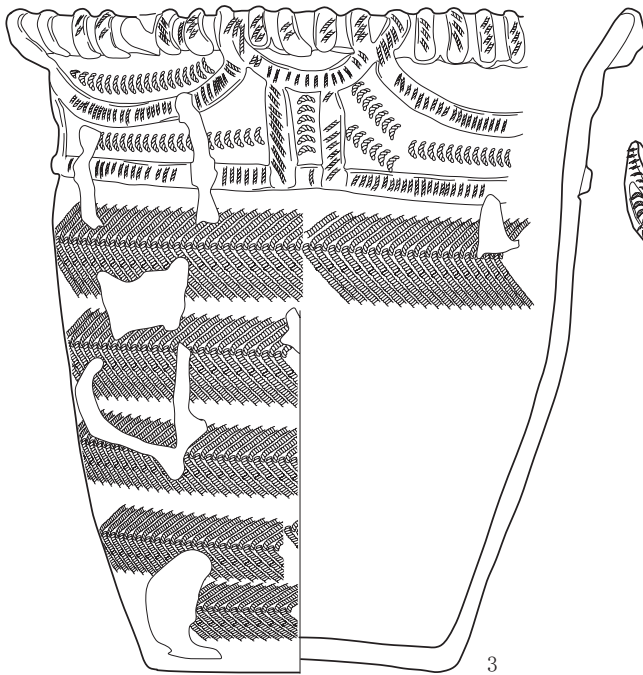
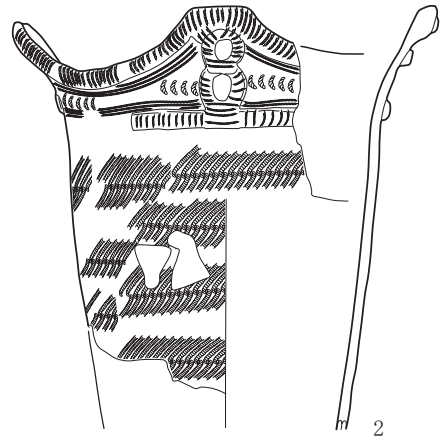
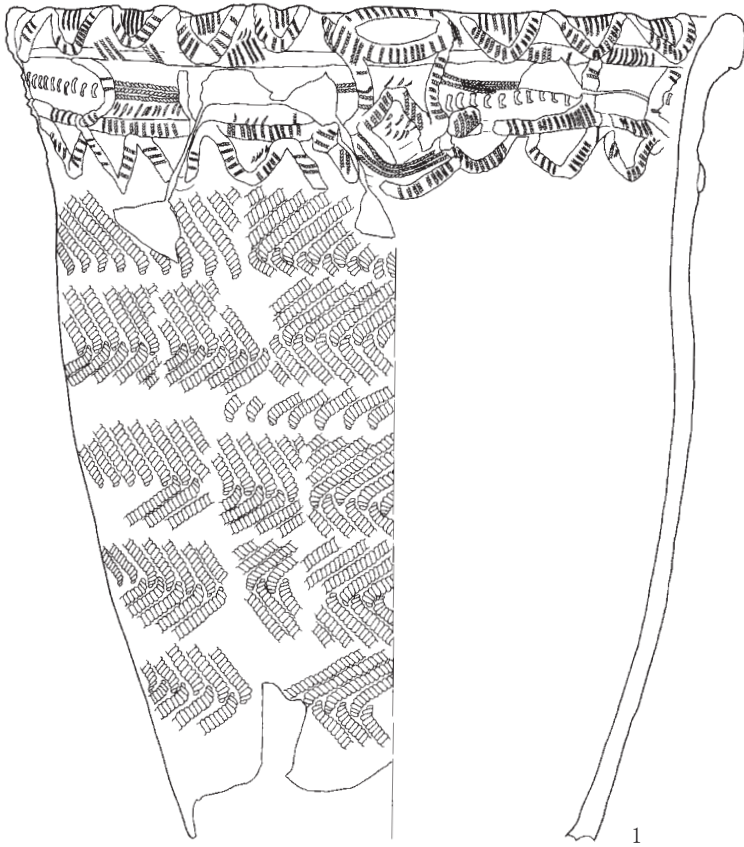
25図 北の谷出土土器 (Ⅲ b 層)



26図 北の谷出土土器 (Ⅲ b 層)

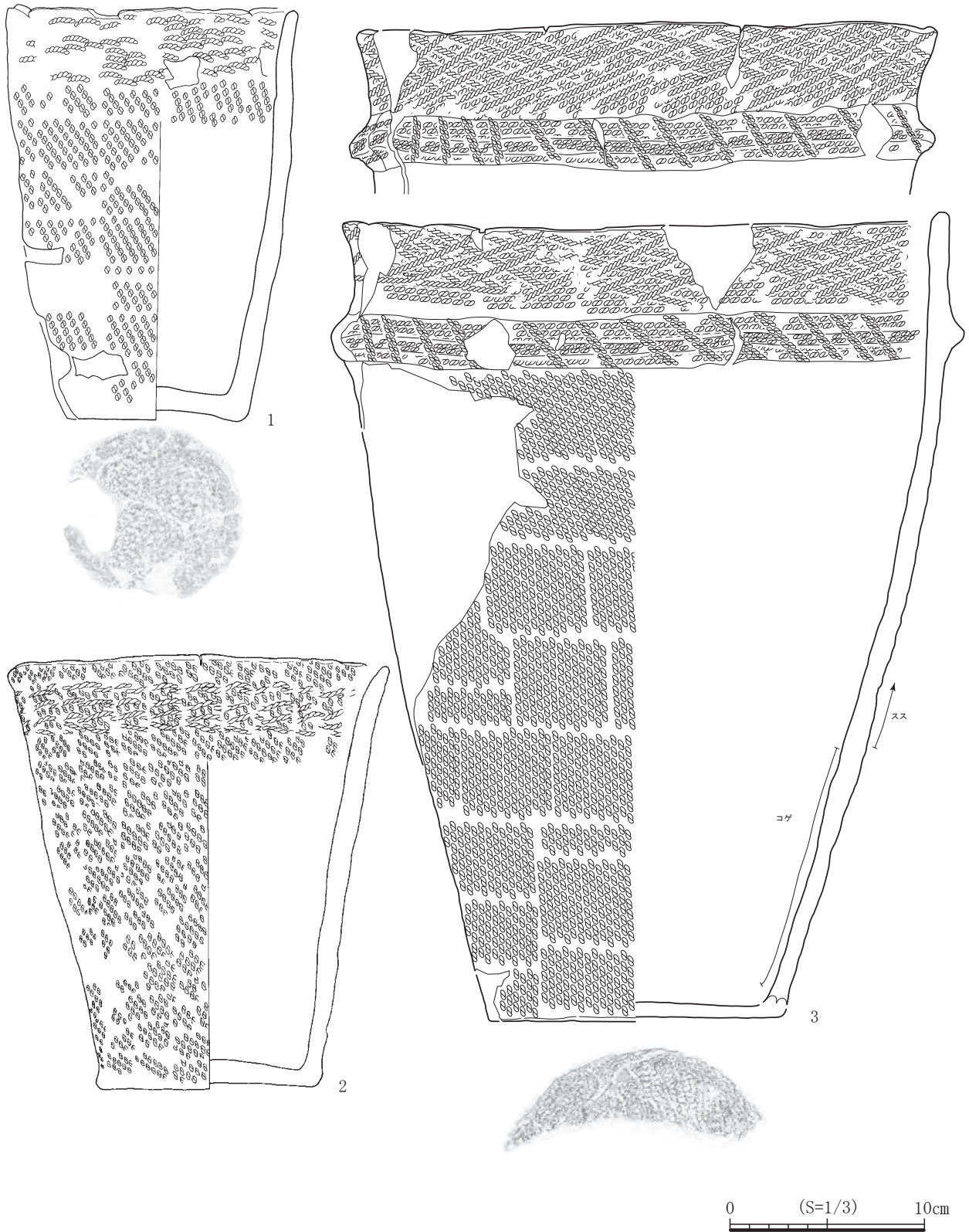


27図 北の谷出土土器 (Ⅲ b 層)

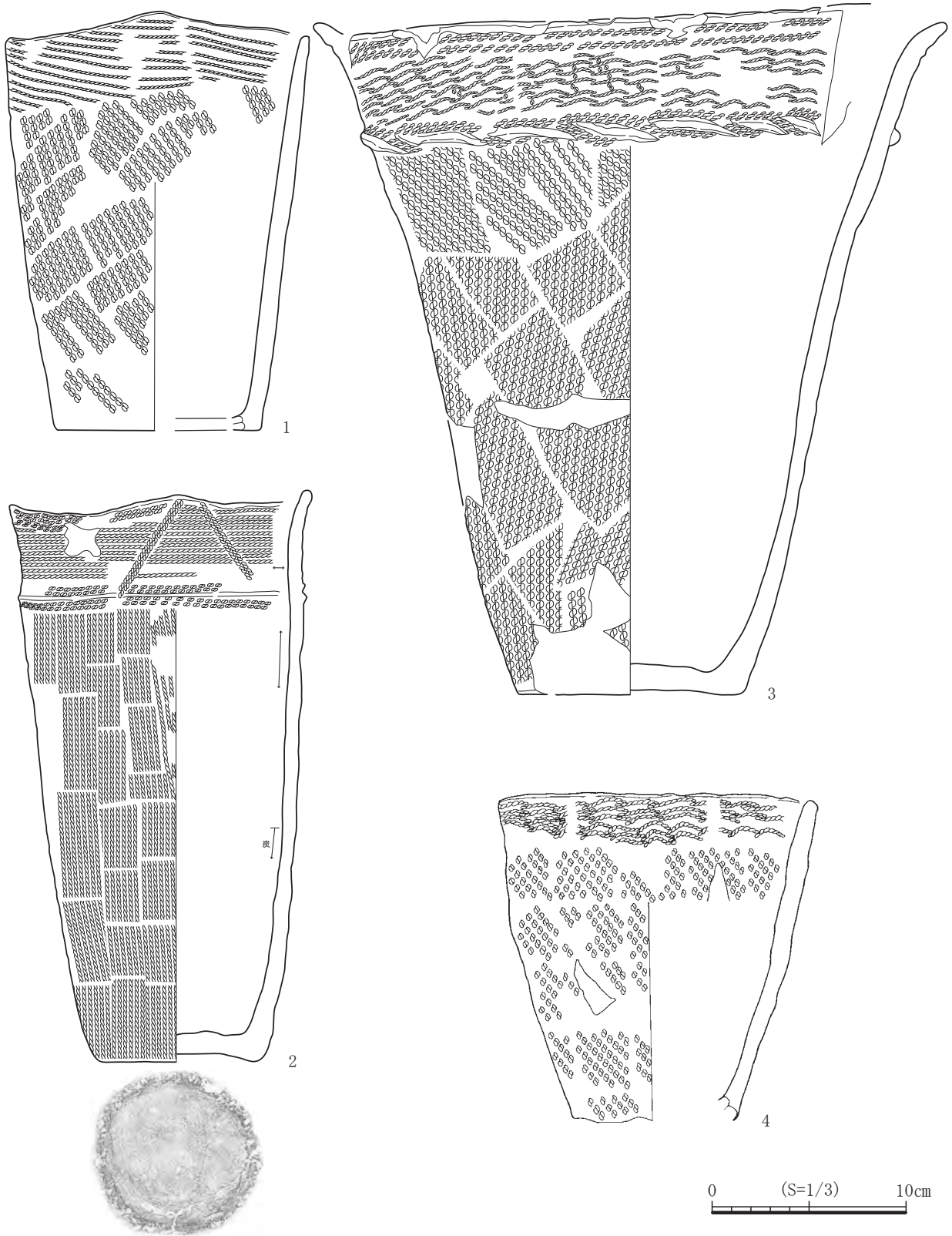


0 (S=1/3) 10cm

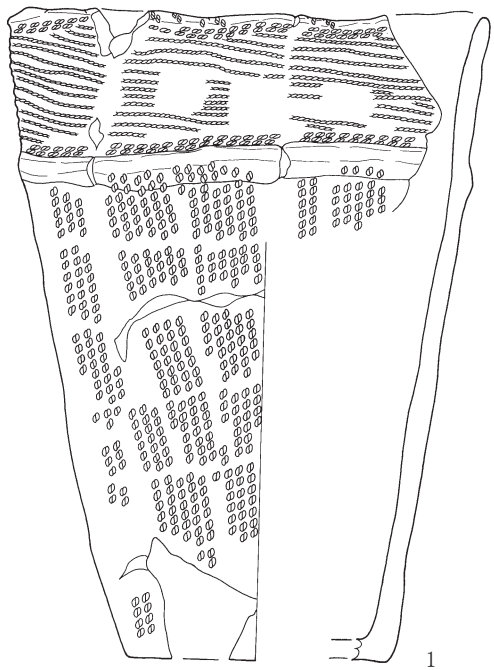
28図 北の谷出土土器 (Ⅲ b 層)



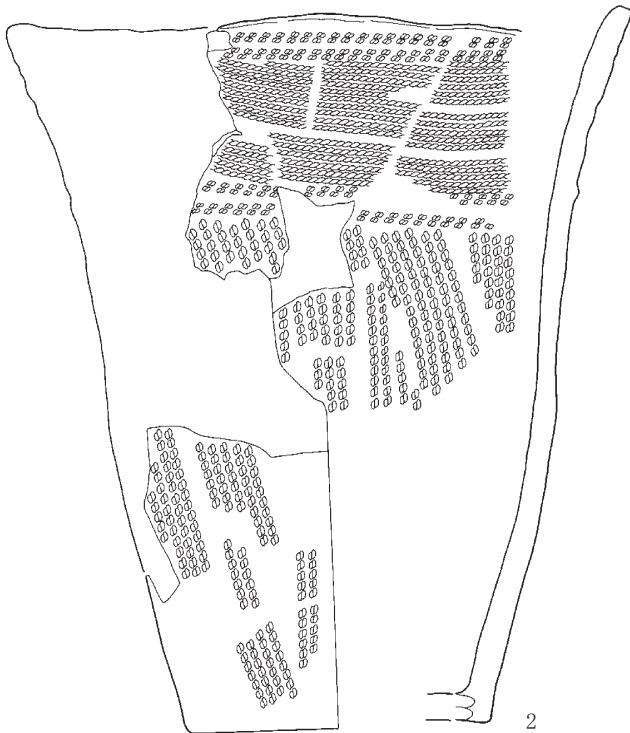
29図 北の谷出土土器 (Ⅲc層)



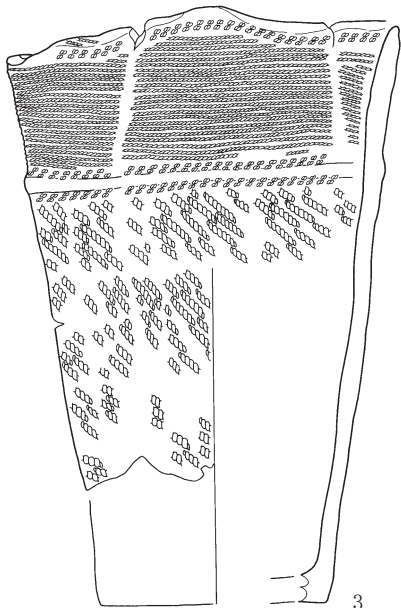
30図 北の谷出土土器 (Ⅲc層)



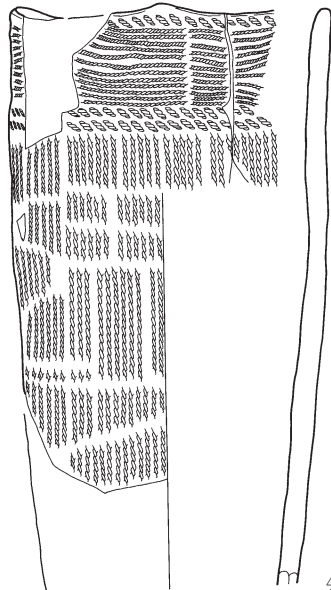
1



2



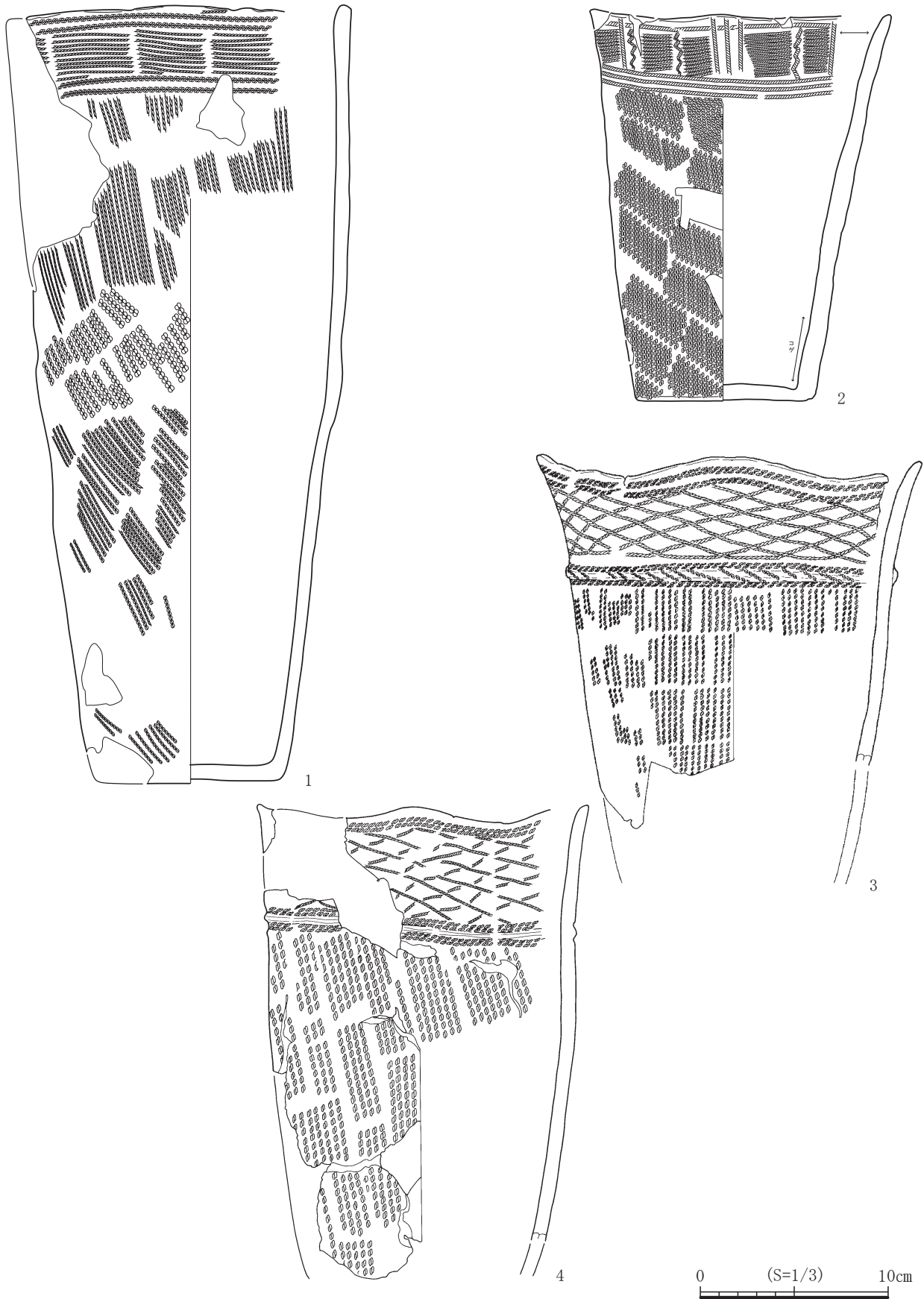
3



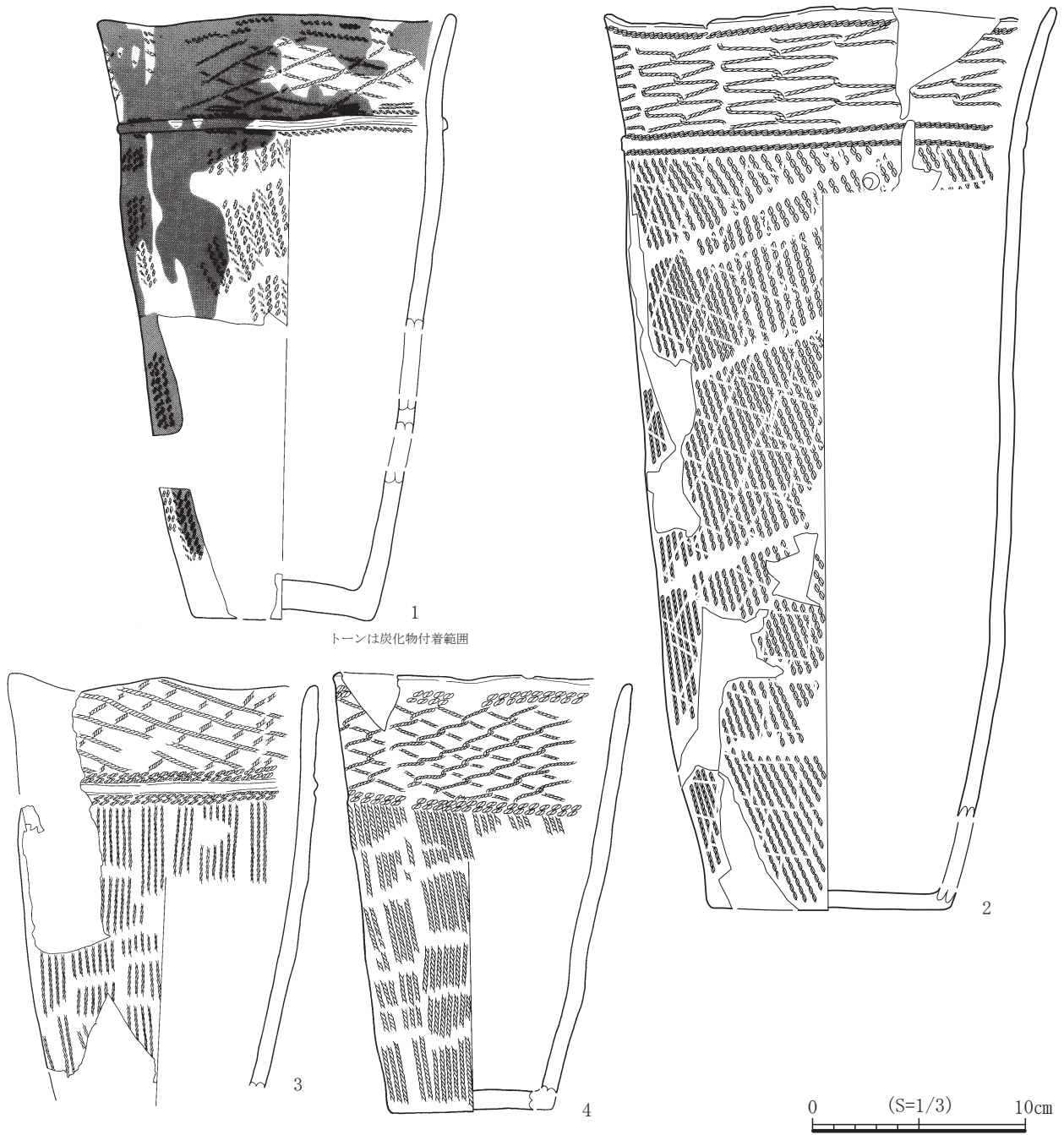
4

0 (S=1/3) 10cm

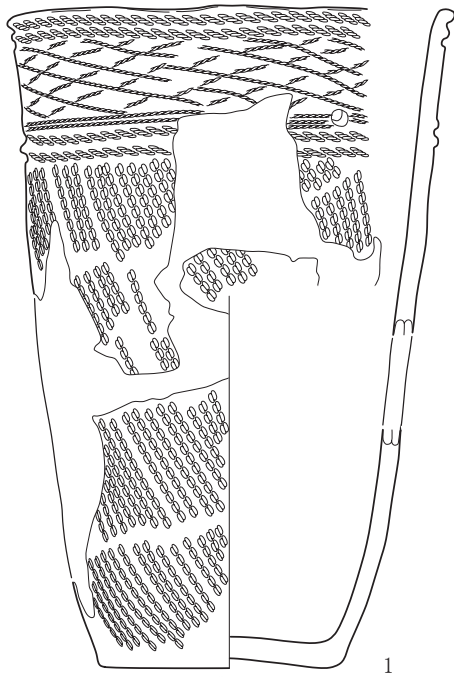
31図 北の谷出土土器 (Ⅲc層)



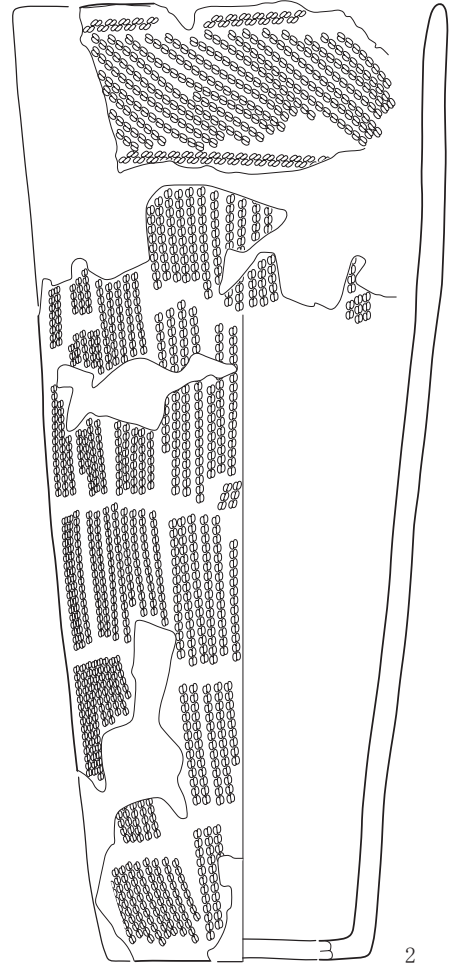
32図 北の谷出土土器 (Ⅲc層)



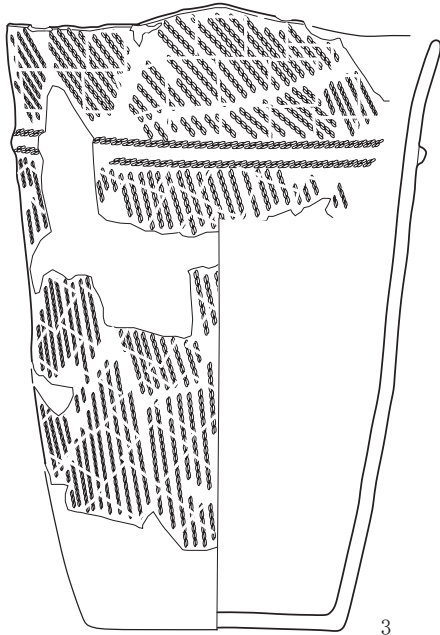
33図 北の谷出土土器 (Ⅲc層)



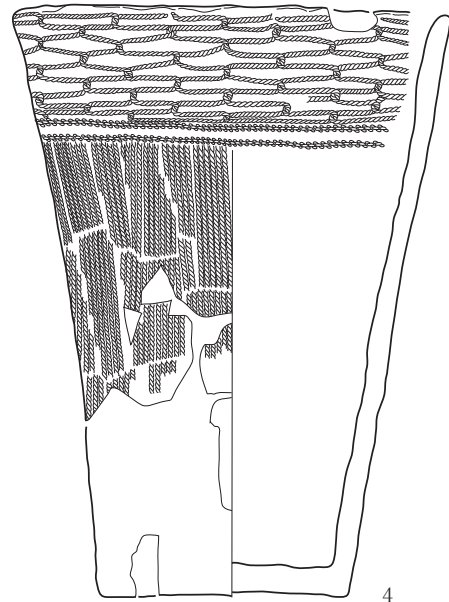
1



2



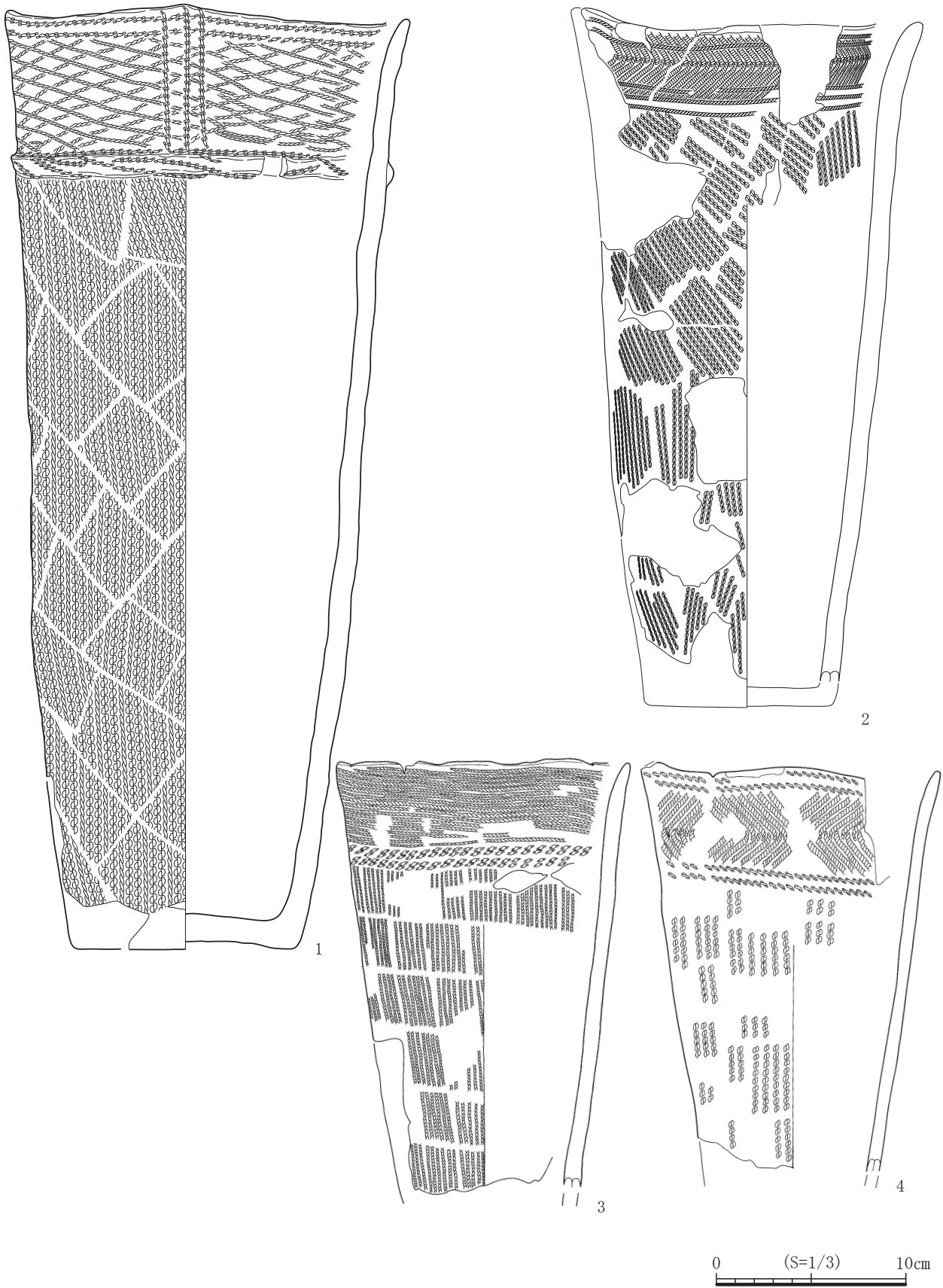
3



4

0 (S=1/3) 10cm

34図 北の谷出土土器 (Ⅲc層)



35図 北の谷出土土器 (Ⅲc層)